
砂の星、響く声 外伝

理祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂の星、響く声 外伝

【Nコード】

N8672P

【作者名】

理祭

【あらすじ】

『砂の星、響く声』本編に含まれないサイドストーリーの掲載をしています。

1 (前書き)

本編以前のお話になります。

新しい年の初めを迎え、街は活気に溢れていた。

バーミリア大水陸の中央、ヴァルガード。純粋量では商業都市トマスをも上回る水源を持つ、ツヴァイ帝国首都である。

その外観はまさに要塞であつた。この世界において水源、特に「枯れない」水源を持つことはそのまま権力の象徴でもあつたから、当然のことと言える。ここは大水陸でも最大水量を誇り、また最も多くの人の血が流れてきた呪わしき場所でもあつた。

不安定な水源の沸き。故に移動可能な生活様式が基本となる世界では、まずもって石造りの街並みという時点で極めて珍しい。如何に堅固な壁をつくろうと、そこに水が沸かなくなってしまうえば人は生活できないからだつた。

だからこそ、この土地を手に入れた時の権力者達は皆こぞつて石を積んだ。より高く、より硬く。

しかしどれほど高く石を積み上げようと、あるいはだからこそ、長らくこの地は戦乱の舞台となつてきた。“妖精の地”というこの地の異名は、あまりに多くの人の軀がここに埋もれてきたことに對する忌み名でもある。

幾度も戦火に巻かれてきたこの地だが、ここ十数年程は平穩の中にある。バーミリアで最大の勢力を誇るツヴァイ帝国は、周辺を無数の敵に囲まれ辺境での小競り合いこそ常のことであるが、相手国の首都まで攻め込むことはあつても逆に攻め込まれるような危機に陥ったことは皆無である。建国からすでに幾代も経ち、強大な国ではむしろ外敵よりよほど警戒すべき内乱の類の兆しもなかった。水陸全土を席捲した「魔女狩りの大災」以降、衆民による動乱もない。

壮年の域に入った皇帝フーギ・スキラシュタの施政は革新的ではなくとも、外征より内部の潜在的な商工業の発展に尽くそうとした先代の意思を継いで賢明だった。

もつとも、そのことには皇帝個人というより、先代からの重臣ナイル・クライストフの影響が色濃いと言われている。幼少時から見知り、自身が皇帝位につくとそれまで空位だった宰相に彼を登用した皇帝フーギの信頼は篤かった。

ナイルの政治的志向は革新的な保守と言われる。国の興りからして外征国の特色が強い自国を、より安定させるための方策を思案していた。ヴァルガードの豊富な水源を利用した周辺の緑農地化はその最たるものだが、他にも様々な例がある。有力貴族の子弟を対象とした『大学』もその一つである。

それは、将来の国の根幹を成す人材の教育という目的に加え、優秀な学者達の保護という意味もあった。学者には奇矯な性格の者もあり、彼らの多くは生活能力に乏しかった。各地の有力者は自身の名声のために高名な学者を自家に招いたが、ナイルはそれを国家規模で行ったのである。

さらに、その大学に他国の有力者達の子息まで招こうとしたところが彼の政治的手腕の妙技であろう。水陸最大国家としての示威を他に明らかにしつつ、他国同士の牽制もその両手に弄び、あれよあれよといううちに大学を一種の水陸最大の社交場と化すことに成功したのだった。

発足から既に数年。多くの高名な学者と各国の高級子弟達が集った大学は、文字通り水陸で最上級の学び舎であった。

雑踏の中、一人の女性が街を翔けるように歩いている。

実際には、その人物は女性というにはまだ年若く見えた。律動的なテンポを刻む足音に呼応して、長く伸びた金砂の髪が揺れている。長身だが容貌にはまだ少女の面影が強い。彼女は先月、十六を迎えたばかりだった。

身に包んだ服装は簡素だが、仕立てのよさが窺える。お抱えの服飾屋が注文の際に一々申し出てくる装飾過多なあれこれを徹底的に排したデザインは彼女の好みだったが、彼女を本当によく知るものであれば、だからこそその変化に気づくかもしれない。彼女のシルクのブラウスの胸元には、金細工の石止めが密やかに飾られていた。試みに耳飾りもつけてみたのだが、すぐに頭が痛くなってしまい彼女はそれを諦めていた。

クリステイナ・アルスタ。それが彼女の名だった。バーミリア大水陸で権勢を誇るツヴァイ帝国において、まず名門と呼ばれるに足る貴族の令嬢である。

アルスタ家は建国から続くが、その名声を得たのも失くすのも常に剣を手にしてであった。一方で政治の類には疎く、皇位継承のいざこざに巻き込まれる形で長らく主流派からは遠くに追いやられることとなった。それでも不平一つこぼさずにいる実直さが周囲から見直されてきたのはつい最近のことである。

それで起きる面倒もある。最近、彼女の家には訪問客が絶えなかった。

理由は考えるまでもない。今になって近づいてくるのは友誼を結び、可能であれば甘い蜜を吸おうという下種な輩ばかりだった。もっとも厳密には彼女の家ではなく、彼女を介した先の相手に、ではあるが。

馬鹿馬鹿しい。端正な顔をわずかに歪め、彼女は口の中で毒づい

た。

そのような浅はかさが、あの方に見通されぬわけがない。家同士の交流の折、何度も会話の経験を持つ彼女は、静かな威厳を身にまとった彼の人物を自分の両親に劣らぬほど尊敬していた。

剛胆でありながら常はそれをひけらかすようなことなく、帝国宰相という位を鑑みれば異常といえるほど社交にも興味を示さない。それでいてその地位に居続けられている現実が、彼の底知れなさを示している。変人ではある。そして、家名に「愚直」と書き加えられていると噂のアルスタ家と同じく、その奇妙さも代々連なるものかもしれない。

この日は新年の無事を祝って皇帝が衆民に酒と休日を賜り、市場はあえてその機を逃すなど大店を構える商人とそれに群がる客が殺到している。賑やかな一画を抜けてしばらくすると、彼女はさきほどまでとは嘘のように閑散とした場所へと辿り着いた。

その中ほど、ただヴァルガードの豊富な水源故に作られた小さな無用途の噴水の傍らに、彼女の探す人物は横たわっていた。

相手の名を呼ぶ時、彼女は彼女だけが気づく一瞬の間を置いてから、囁いた。

「――ニクラス」

目を閉じていた人物は、その呼びかけにゆったりとした反応を返した。清濁併せ持つことを自ら使命としているようなトマスなどと違い、ヴァルガードはこの水陸でも恐らく最も治安のよい街ではあったが、振舞い酒のせいで人々の気が緩みがちな中、のうのうと眠りこけていて無事にすむ道理はない。まさか本当に寝入っていたとは思えなかったが、彼女がたっぷり数秒を数えることができるほどのびやかさでまぶたを開けたその人物は、まず彼女の背後に広が

る青々とした空を瞳に映し、何事かを思案するように眉をひそめ、それからようやく彼女の姿に焦点をあわせると、

「……ああ。クリスマスか」

いくらか気が抜けていたが、彼がきちんと自分の愛称を呼んだことに、彼女は内心で満足した。この男は生きることの様々な自分だけの制約を課しており、他人の名前を縮めて呼ぶという些細なことにもかなりの間、余人には理解しがたい抵抗を示していた。

感情の動きを完全に肌の表面下で制御しつつ、クリスマスは片眉をあげる。

「新年最初に会っての言葉がそれか？　二クラス」

からかいの言葉を受け、眠気を払うように頭を振った二クラスが応えた。

「昨日、王宮で会ったばかりじゃないか……」

「それは公的な場での話。プライベートでは、今この瞬間に新年を迎えたばかりよ」

男は、感情の窺いしれない眼差しを向けると、一旦瞳を閉じ、開いた。

「……おはよう。クリスマス。新しき年の祝いを、君の輝ける武勲への祈りとともに」

高すぎず低すぎもしない、耳に心地よい音階で彼が口にしたのは、正しく彼女好みの文言だった。

「おはよう、二クラス。新しき年の祝いを、貴方の生あることへの感謝を込めて」

胸を張り、彼女はわずかに唇の端をほころばせた。二クラスもかぶりを振りながらそれに応える。

「それで、どうしてこんなところで惰眠を貪っていた。いくらなんでも、誰に襲われても文句は言えんぞ」

「……バザーを見学に、きてただけだ。知らない相手にいきなり

葡萄酒を両手に渡されて。しばらく頭を冷やしてた」

言われて初めて、クリスマスは彼の口元からかすかに酒の匂いが漂うことに気づいた。

「また馬鹿なことを」

「あんなったらいくら断つても相手は話を利かないよ。酔っ払いは適当に受け流して機を待つのが正解……クリスマスは、大学でも飲まないからわからないだろうけど」

「当たり前だ。好んで自ら醜態を晒すような真似、私にはまるで理解できない」

「楽しいんだけどな、酒も」

「そんなものがなくとも、私は充分に人生を楽しんでいる」

ふくよかな膨らみを誇るように宣言する彼女を、二クラスは天空輝く炎の星をみるような表情で仰ぎ見て、笑った。

「それでこそ、クリスマスだ」

「なんだ。物を含んだ言い方じゃないか」

「なんでもない。それより、よかったら市場に戻らないか。見たことのない食べものもたくさんあった。そのために家の食事を抜いてきたんだ」

「相変わらず物好きなことだ」

呆れるように言いながら、彼女は特に顔をしかめることなく頷いた。一般的な貴族階級の人間がそうであるように、彼女も大学に入るまでは市井の売るものなどなに入っているかわかったものではないと当然の如く思っていたものだが、そんな思い込みもこの男との出会いによってあっさり打ち破られてしまった。

変人。正しく、家の血の流れるとおりに。自分がこの男と出会ってから半年ほどがたつが、そのことで自分にはいったいどれほどの変化があったのだろうか。男の存在が彼女に接し、交じって溶けることの想像は人知れず彼女の頬を薄桃に染め上げたが、それに気づ

いているのかいないのか、どちらにせよ微動だに表情の筋肉を動かさずに、男は言った。

「よし、行こう。……よかった、財布はなんとか失くさずにすんでる」

ツヴァイ帝国宰相の実子がなにをせせこましいことを。彼女よりわずかに高い位置にある肩に並び、クリスは生じた皮肉めいた感想を胸の中で押し殺した。二人きりの道中を、もう少しばかりこのままの雰囲気で過ごしたかったからこそその選択であった。

「それで、今日は何時頃に向かうつもりなのだ？」

屋台で適当に食べ物漁りながら訊ねたクリスの言葉に、二クラスは冗談のない表情で眉をひそめた。

「向かう？」

クリスは呆れた。

「今夜は大学の来新歓宴会だろう。忘れていたのか？」

「ああ。そういえば、そうだった」

二クラスは嫌そうに頷き、脳裡をさらうように瞳を閉じた。

「大講堂で、開始は十九時からだったか？　あまり、気が乗らないな」

「子どものようなことを言うな」

ぴしゃりとした声でクリスはたしなめる。

「普段の夜会とはわけがちがう。今夜の観宴会は我々にとってほとんど公的なものだ。ホストたるツヴァイ、そして大学を一番に推し進められたナイル様の顔に泥を塗るつもりか」

正論に、二クラスは渋面になって押し黙る。さらに言葉を放とうとして一瞬それに戸惑い、やや勢いの乏しい口調で彼女は続けた。

「我々には……責務があるのだ。二クラス」

その言葉を聞いた二クラスは、今までがそうであったように、顔に微妙な表情を浮かべた。異物を飲み込むような表情のまま、ゆっくりと首を頷かせる。

「わかってるよ。だけど、ちょっと困ったな。別に忘れてたわけじゃないんだけど、誰にも同伴の話をしてなかった」

やっぱり、完全に忘れてたんじゃないか。浮かんた言葉は繰り出さず、かわりに彼女は別のそれを舌の上に転がした。

「ならば、私が供をする」

二クラスは軽く目を見開いた。

「何を驚く」

「いや。……相手、決まってるのか？」

「決まっていない。それが何か？」

当然のようにクリスは言うが、二クラスが意外に思うのも無理からぬことではあった。彼女ほどの相手であれば夜会の誘いなど引く手あまただろうし、当日までパートナーが決まっていないはずがない。

この時二クラスの知らない事実は一つあった。一つは、彼女への誘いは決して多くなかったこと。それはもちろん彼女自身の魅力所以のことではなく、むしろ彼女の連れは既に定まっているものほとんど周知されていたも同然だったからである。もう一点、それでも彼女に声をかけてくる者もないではなかったが――クリスは丁寧な返事をもってそれら全てを断っていた。そのことと理由についてわざわざ彼に話す必要を彼女は認めなかった。

「私では不足か？」

「そんなわけではないだろう」

貴族らしからぬ簡素な服装に身を包みながら、さきほどから道行く人々の視線を一心に浴び続けている彼女に、苦さのまじった笑みで二クラスは言う。

「助かるよ、クリス。今夜、一緒に行ってもらえると嬉しい」

「喜んで。二クラス」

夕刻の迎えを約して二クラスと一旦別れたクリスを、玄関の前で男が出迎えた。

「お帰りなさいませ、クリスティナ様」

そっけなく頷き、そこからさらに感情をそぎ落とした声と態度で彼女は続けた。

「今夜の舞会、二クラスと出る事になったわ」

「おめでとうございます」

「……ん」

綻びかけた表情をあわてて引き締める。

「すまないけど、誰か手のあいている者がいたら、あとで私の部屋に呼んでくれないかしら。全く、今からでは準備も事だわ」

「はい。至急、ファビオラをお部屋に参らせませう。ご一緒にお飲み物などは如何ですか？」

「ええ、お願い。部屋へは一人でいいわ」

自室までついてこようとする男を下がらせ、クリスは屋敷の自室に戻ると窓際の椅子に腰掛けた。よく庭師の手入れが行き届いた中庭を眺め、それから落ちつかないに立ち上がると姿見の前に立つ。自分では鋭さの勝ちすぎているように思える顔を睨みつけ、ため息をついて今度は衣装棚へと足を向けた。

相談役の相手が来るのも待ちきれないでいる。なんとも気の急いたことだ。自分を笑いながら、一人きりの部屋では他の誰に憚ることもなく、彼女はようやく自身に思う存分口元を緩めることを許した。

開けた衣装棚には数多くの衣装がしまわれている。一見して、それらは全て、既に二クラスの目に触れたものばかりに思えた。こんなことならなじみの服飾屋に頼んで新しいドレスを仕立てておけばよかった。体型に変化があったわけではないと思うが――月に一度の測りの結果を思い出しながら、物思いに悩む自身の表情が小さな鏡に映り込み、彼女は顔を赤くした。

これでは女そのものだ。いやもちろん、そうであることを忘れたつもりなど一時もないが。

ふと、胸元に光る石飾りに目がいつて、彼女の瞳が夢から醒めたように色を戻した。今日のこれまではおおむね彼女の思い描いたとおりに進んでいたが、唯一つ不満だったことといえば、ニクラスがこの飾りについて何も感想めいたことを言ってくれなかったことだった。

もともと世辞の類を言うような性格ではないから、仕方ないのかもしれない。落胆が勝手な思考であるとは自覚しつつ、すこしばかり差した心の影を振り払うように彼女は頭を揺らした。

斜陽に転びかけた気分を晴らすために日課の剣を振りに部屋をでかけ、扉を出たところで飲み物を伴って現れた女中と鉢合わせしたクリスは相手に大笑いされてしまうこととなった。

幼くから砂にまみれてきた者の証である褐色の肌をしたファビオラは、アルスタ家に多く勤める女中達の中でも特に古株の一人だった。女中長と料理長の両方の経験を持つ異色の人間で、幼い頃にはクリスの乳母役も務めている。自身の子育てが落ち着いてから再びアルスタ家に戻り、それからは堅苦しい役職から離れクリスの侍女のような役割を負っていた。職責と階級差の激しい女中達のなかで特異な存在ではあるが、持って生まれた人柄のために彼女を毛嫌う者はない。クリスにとっては文字通り、母にも似た存在でもあった。

「そんなものの気にすることじゃありませんよ、お嬢様」

主人の奇行の原因を知った彼女は、遠慮のない態度でそう言った。「男なんてものは元々、細かいところまで目が行き届く生き物じゃありませんからね。宝石の価値にも値札がついてはじめて合点するような輩です」

「……そういうものだろうか」

家の中では彼女を相手にした時にだけ使う、繕いのない口調でクリスは言葉を紡ぎ、息を吐いた。老女中はにんまりと笑み、

「もっとも、あのクライストフ様のご子息のこと、世の男どもとは一味違うかと思いますがね。気づかなかったのは、違う理由があったのかもしれない」

「なんのことだ？」

素直に訊ね返すクリスに、ファビオラは澄ました顔で告げた。

「こんなにも愛くるしいお顔が近いとあらば、いくら光り輝く宝石でも目に霞んでしまうというものです。ニクラス様のことをお話になるお嬢様は、それが良いことであっても悪いことであっても、どの物語にでてくる姫君より人の琴線を震わせます」

「からかうのはよせ」

自身の無粋を知る彼女は苦虫を噛み潰した顔になったが、ファビオラの目は真剣だった。

「とんでもございません。婆の言葉を疑いますか。なんなら街の雀どもに聞いてまわってもようございます。お嬢様は如何な深窓の姫君にも劣るところございません。なにせ、この婆のお嬢様なのですから」

「わかった。わかったから無茶はよしてくれ」

老齢にも近い身で街を歩きまわるようなことになれば、寿命を縮めてしまいかねない。苦笑してクリスは彼女の言葉を受け入れた。

「いいですか、お嬢様。女は皆、生まれながらに宝石でございます。輝く術も違えば、光り方も異なる。お嬢様は既に充分な輝きをお持ちですが、それ以上のものをご所望とあらば、よろしい。術は婆が存じております。いくらでもお力になりますよう」

「……あの唐変木の目を向けさせるのには、いったいどの程度の努力が必要だろうな」

「さしあたっては、この程度のものでしょうか」

言いながらファビオラが取り出したものを見たクリスの顔が歪む。女性の胸部から腰にかけて矯正することを目的としたその着装具は、

息苦しさがあつて彼女にはどうしても慣れなかった。

「自然体の美しさもあるんじゃないかと思うんだが」

「宝石の輝きも圧力があつてのものでございます」

逃げの言葉を打つクリスに、年老いた女中はあつさりとそう切り返した。

二クラスは、約束の十分前に家を訪れてきた。

家を訪れるのに遅れるのは無論、訪問の儀礼に反しているが、早すぎるのもまた相手にとって迷惑なことではある。しかし、こういう場合必ず丁度の時間に現れる男の徹底ぶりは、少し度が過ぎているほどだった。

自身の背にある家名を慮つてのことだ。早い時間に訪れれば、クリスが来るまで代わりに誰か家の者が彼の相手をすることになる。なにせ帝国宰相の実子なのだから、家にいれば彼女の父親だって顔を出さないわけにはいかない。相手にそう気を使わせるのを嫌い、それ以上に自分自身そういったことを煩わしく思っているから、彼は決してその時間帯を外さない。

気持ちにはわからないでもないが。執事から男の訪問を聞いたクリスは、壁時計の針を見て相変わらずぶれがないことに苦笑し、椅子を立った。

実際、近頃になって再び社交のしがらみに絡まれ始めているアルスタ家の一人として、同じような思いはある。彼の場合、さらにその数倍だろう。あの奇矯な性格はそのなかで形成されたのか。いや、あの性格だからこそ、そういう反応になるのだろう。つまり自分もあちら側であるという自覚は、彼女にもあるのだった。

「お持ちするお飲み物は暖かい葉茶でよろしいでしょうか」

自室を出る際そう訊ねてきた執事の男に彼女は考えて、首を振った。

「今、キッチンは忙しい？」

「夕飯の準備中ではあるかと存じます」

「そう……。私が行くと、邪魔になるかしら」

「なにか御用でいらっしゃいますか？」

「私が、お茶を淹れようと思ったのだけど」

男は薄く穏やかな微笑みを浮かべ、

「どうぞお気遣いなく。キッチンでも何も戦争が起きているわけではございません。ご案内いたします。しかし、ニクラス様をお待たせしてしまうことになりますが」

「フアビオラがね、言っていたの」

男の言葉に本心を隠しながらかわす為、クリスはさっきまで着付けを手伝ってくれていた女中の言葉を用いて言った。

「空腹こそ最高の調味料。男は少しくらい待たせておいた方がいいって。……あなたは思う？」

男は口元の笑みを少しだけ強く、執事として過不足ない態度で頭を下げた。

「まさに砂海をさまよった果てのオアシスの如くかと存じます」

そこまでいくと、逆に嫌がらせな気がするが。苦笑しながら、クリスは男の先導に従った。

急に家人が現れた料理場の人間は誰もが驚いた様子だったが、年若い彼女の希望を聞いて嫌な顔をする人間はいなかった。

忙しそうに働く彼らの邪魔にならないよう、クリスは執事からてほどきをうけてお茶淹れの準備を整えた。ティーカップも彼女の好みのものを選び、沸かしたお湯で温めておき、分量を吟味して香りの高い茶葉をポットに落としお湯を注ぐ。それらを全て自ら手に持って、彼女はキッチンを出た。

「みんな、邪魔をしてごめんなさい。ありがとう」

夕食前を迎え、執事の言葉でいうならキッチンはまさに“戦争のような”状態だった。そんななかで我儘を許してくれたことへの感謝を伝えると、彼らはさすがに手を止めることは出来ない様子だったが、笑顔を返してきてくれた。

「お嬢様、がんばり！」

「こおら、タリア。あんたはさっさとお皿の準備をしろ！……いつてらっしゃいませ、お嬢様。ご武運をお祈りしております」

戦場へ見送るような文言に生真面目に頷いて、クリスは男の待つ部屋へと向かう。

応接間では、二クラスが眠そうな表情で頬杖をつき彼女を待っていた。

「すまない、待たせたな」

「いや、少し早かったか？」

言いながら、男が自分の持つ盆に視線を向けたのがわかった。

「今日は私が淹れてみた」

「それで遅かったのか。どうしてまた」

「向こうに着くのは、少しでも遅いほうが気が楽だろうと思ってな」

彼女の言葉の意味を理解した二クラスの眉に皺が寄った。小さく笑う。

「気を使ってくれたのか」

夜会の開宴は十九時だが、そのような場合、一般的に参加者は一時間程前を目処に会場を訪れる。それから開宴まで行われるのは挨拶回りや歓談、つまり社交なのだが、それはこの男が一番毛嫌っていることでもあった。

「煩わしく思っているのは、私も同じだからな」

澄ました顔で彼女はお茶を淹れ、男の前に差し出した。青白い陶器製のカップを手にとった二クラスが、暖気のなかに混じる香りに口元を綻ばせる。それを見届けてから、クリスマスも自身のカップに手を伸ばした。

しばらくの間、会話はなかった。彼女はそれを不快に思わなかった。

葉茶の香りを楽しみながら、窺うように彼女は男を見る。正礼装ではないが、黒の礼服を自然と着こなした姿は生まれながらの貴族として堂にいつている。それなのに奇妙におかしみを感じてしまうのは、普段とのギャップがあるからだろう。

もつとも、それを笑える自分でもない。急にクリスマスは自分のことが気になった。

濃く引き延ばした新しいドレスは、着るのは初めてだ。ファビオラが母の意を受けて昨年うちに注文してくれていたのだという。サテンの滑らかな触り心地も空を純粹に溶かしこんだような色も、装飾を控えめに抑えながら流行をとりいれたデザインも彼女の好みにあっていたが、それが似合っている自信はあまりなかった。

二クラスも何も言わない。いや、この男が何も言わないのはいつものことだ。クリスマスはわずかに顔をしかめた。昼間は挫折した耳飾りだが、今また水晶石をあしらった飾りをつけているせいで、さつきから耳朵に鈍い痛みがあった。

「大丈夫か？」

そういうところにだけはすぐ気がつく。クリスマスは肩をすくめた。

「問題ない。少し、堅苦しいだけだ。どうにも身動きが取り辛い」

「似合ってるよ」

「世辞ならいらず」

思わず仏頂面で返すクリスマスに、男は息を吐いて言った。

「素直に受け取ってくれてもいいだろう」

誰のせいだ。言いかけて、彼女は言葉を飲み込んだ。その台詞はあまりに本心が透けて見えて、はしたないもののように思えた。

「こういったものが似合わないというのは、自分で一番わかっている。私は剣しか振ってきていないからな。それが社交の華を気取るなど、おこがましいというものだろう」

「後悔してるのか？」

ほんのわずか、男の口調に咎めるような響きを感じとり、クリスは首を振った。

「まさか。そういうわけではない。すまん、おかしなことを言った」
会話を打ち切って彼女はカップを口に含んだ。何か言いたげな表情で、しかし口は開かずに二クラスは壁掛けの時計を眺めやる。

「そろそろ出ようか。半前にはついていたほうがいい」

「ああ。行こう」

立ち上がり、部屋を出たすぐそこに執事の男が控えていた。

「それじゃあ、行ってきます」

「は」

一礼し、男が先導して先に歩き始める。二クラスと連れ立ってクリスは廊下を歩いた。すれちがう女中達が立ち止まり、頭を下げて見送ってくれる。正門を出て二クラスの待たせていた馬車に乗り込む際、外までついてきた男が言った。

「ご武運をお祈りしております」

ゆったりと馬車が動き出し、少ししてから二クラスが口を開いた。
「相変わらず、今から戦争に行くような気分だ」

「私にとってはどちらも大して変わらん」

男が笑う。

「社交は剣のない戦か」

「剣ならある」

「……そうなのか」

二クラスの視線が興味深そうにドレスのラインをなぞるのを見て、
クリスは顔を赤らめた。

「ばか。心がけのことだ。不埒だぞ」

3

王宮をこの街の中心として、やや東に離れた地区に大学はあった。

周囲には国立図書館や工房地区も併設されており、独特な雰囲気がある。学生達の住处、そして彼らを目的とした店も多数開かれていた。夜になると路上で眠る学生の姿を見ることがある、それを自由な空気というか、らしからぬ品のなさとするか人は人それぞれであろう。

馬車が目的の場所に着くころには、すっかり日が落ちて暗くなっていた。同伴者のエスコートを受けて降りた先に、闇に浮かび上がる石積み建物がそびえ立っている。

派手な服装に身を包んだ案内役の少年が、勢い込んだ直角の礼で二人を出迎えた。

「こんばんは。ご案内致します、どうぞこちらへ」

目をあわせる。二クラスの左隣に立ち、クリスは彼の腕にそっと自身をからませた。

毛織の敷き詰められた道を歩く。先を歩く少年の後ろ姿がしゃちほこばっていた。緊張しているのだろう。大学で行われる催事で運営にかりだされるのは、まだ社交の場に立つ前の年少者達の役割だ。それは場の空気に慣れ、人の顔をおぼえるためということでもある。精一杯に大人ぶろうとしている態度は素直に微笑ましかった。

ぎくしゃくした少年の案内の先にいたのも、やはり派手な服装の男だった。その人物は二人と同年代で、男は二人を見ると、おおげさな態度で表情を輝かせた。

「お待ちしております、二クラス様、クリスティナ様」

少年が驚きの表情でこちらを振り返る。微笑もうとしたが、怖がらせることになりそうだったのでクリスはやめておくことにした。代わりに、その無作法には気づかない振りをする。

「こんばんは。遅くなって申し訳ない」

「とんでもありません。皆様、お待ちでございます。どうぞ中へ」男が頷きで合図を示すと、扉の前に立っていた別の厳しい男がドアを開け放ち、中に向かってよく通る声を発した。

「ニクラス・クライストフ様、クリスティナ・アルスタ様！」

新たな招待客の到着の案内に、ざわりと中の空気が蠢いたのがわかった。

扉を抜けると、天井の高い部屋に大勢の人間が集まっていた。普段は観劇などにも扱われる大講堂に色とりどりの華やかさが溢れている。人と物、その両方の贅沢の極みがそこにはあった。

その中で、人々の視線が二人に集中していた。隣で男が小さく息を吐く音が聞こえる。

「戦はまだ始まってもないぞ」

「わかってる。……それにしても、少し香りが強いな」

クリスは小さく頷いた。室内にはあまり嗅ぎ慣れない香りが焚かれていた。こもるようで、あまり彼女の好きな種類のものではない。

「悪酔いしてしまいそうだ」

「飲むのか？」

意外そうな声に、ちらりと上目を送ってクリスは言った。

「私はお前の心配をしている」

ニクラスは肩をすくめた。

「この雰囲気じゃ、楽しんで飲む気にはなれないよ」

減ることのない無遠慮な視線の群れに、クリスは目線を動かさず

に周囲を観察した。多くの人間が到着したばかりの彼らの同行を見守っているが、あえて気にしない素振りをしている人物も何人かいた。その中で本当に気づいていない人間がいたとしても、ごくわずかだろう。他には何かしら理由がある。虚勢か、悪意か。その理由が何かはともかく、彼女はその人物の顔を記憶にとどめておくよう注意した。それは自分の役目であると彼女は思っていた。

もつとも、そのようにわかりやすい連中ならそう危険でもあるまいが。そんな感想を抱く。面従腹背どころか、一瞬前まで味方だったはずの者がいつそ華麗に裏切ってみせるのが、政治という伏魔殿の恐ろしさだった。

「お前がまず誰に話しかけるか、賭けでもしてる連中もいるだろうな」

今現在の大学社交界において、二クラスは最も注目される一人である。その彼が最初に挨拶を交わすのは誰か。くだらないことだが、そんなことを気にする輩がここには大勢いる。他国の王族のように一挙手一投足が見られるというのは、確かに煩わしいことではあった。

「向こうから来てくれればまだ気が楽なだけだな。とりあえず、イシク先生でも探そう」

「……顔を出してくれているといいが」

彼らがよくしてもらっている人物だが、やはりというべきか、大の社交嫌いで通っている。

結局、その人物と会うことは出来なかった。通りがけのテーブルで顔見知りには捕まり、それを機に他の連中までもが集ってきてしまい、彼らはそのままそこに長く留まることになった。

立食式の夜会は、参加者こそ大学に関わるほとんどの人間を呼び込まれた盛大さではあったが、形式としてはそこまで堅苦しいもの

ではなく、開宴して数人が挨拶に立った以外は自由な歓談を中心に推移した。講堂の中央では演奏にあわせて踊りを楽しんでいる人々もいる。

クリスは一人、壁際のソファに腰掛けていた。連れの男はさきほど、水を取りにいったきりまだ戻ってこない。恐らくどこかで誰か出席者に捕まっているのだろう。

テーブルで何十人目からの挨拶を受けていた頃、彼女は頭痛がひどくなってきていることを自覚した。それに気づいた二クラスが居合わせた人々に断りを入れて、彼女を人ごみから離れたここへ連れてきてからまだ半刻もたつてはいない。

耳飾りのせいだ。それにこの香りも。耳から外した水晶のきらめきを手のひらに転がし、クリスはため息をついた。偉そうなことを言っておいて、自分が彼の足を引っ張ってしまったては意味がないではないか。

——やはり、不向きなのだろうな。

自嘲に笑う彼女の前に影が立った。連れかと思ったが、違う。彼女は表情を固くした。

「これはこれは。アルスタ家ご令嬢様ではいらっしやいませんか」言葉面は丁寧な裏にある刺に気づかぬわけもなく、しかし彼女は努めて感情を抑えた口調でそれに答えた。

「……ごきげんよう。マヒート様。ゼラビア様」

そこに立っていたのは一組の男女だった。

ともにこれでもかというほど華美な服飾に包まれた二人。平面じみた顔の造作が似通っているのは、彼らが実際の兄妹だからだった。表情に張りついた笑みまでが不気味な相似形をかたどられている。特権階級という文字通りの透明なマントを羽織った態度だった。

「こんばんは、クリスティナ様。とても素敵なおドレスでいらっしや

いますわね」

小柄な少女は小鳥の囀るような可憐さだが、そこに毒花の美しさを重ね合わせたのはクリスの偏見かもしれない。しかし、彼女がそう思ってしまうだけの理由も存在している。

「クリスティナ様のお姿に似合っていて、とても綺麗……。やっぱスタイルが違いますのね。私も今度、剣を習ってみようかしら」
「おいおい、やめてくれ。お前が剣を振り回したりなんかしはじめたら、親父も母様も卒倒してしまうぞ」

「あら、どうして？ クリスティナ様はどの殿方にも劣らない剣の腕前だと評判ですよ。お茶会などでもよく話題なのですから」

大仰に身をのけぞらせる男に流し目を送り、それからクリスへと視線が向けられる。

「ねえ、クリスティナ様？」

それが何についての同意を促した言葉であるのか、クリスには理解できなかった。いや、そうではないとすぐに思い至る。これはただの皮肉だ。

論すように男が言う。

「クリスティナ様は武門の生まれでいらっしゃる。お前が剣など握ってみろ。すぐにタコができて、舞踏会にも出られるなくなるぞ」
その言葉に、ぴくりとクリスは膝上で指先を震わせた。

「まあ、それは大変……そういえばクリスティナ様は、今日は踊られないのですか？」

「――少し、気分が悪くなってしまって。休んでいるところです」
「それは大変！ お水は必要ございませんか？」

「いえ。今、連れが取りにいつてくれていますので。どうぞお気づかないなく」

気を使うくらいなら早くどこかに行ってほしい。とも言えず、やんわりと断る彼女に少女は思案するような表情になる。

「あら、二クラス様でしたら、先ほどどなたかと踊られているのをお見かけしましたけれど……気のせいだったかしら？」

「ああ、確かヴィスコーラ家のアリアス様と一緒にだったね。今もうじゃないかな」

まさか。いや、一人でいるところに相手から誘いを受ければ、断るに断れない状況もあるだろう。それにヴィスコーラ家といえど他国の大貴族。ホストたるツヴァイの人間が、外交上の礼を逸するわけにはいかない。充分にあり得ることだ。

彼女は平静に思考をすすめたが、目の前に立つ少女が首をかしげた。

「クリスティナ様？　お顔の色が悪くなったようですけれど、どうかなさいましたか？」

「いえ――」

優れぬ気分では、苦手な相手への応対もそろそろおっくうになってきていた。陰湿な言葉にもうんざりする。いつそ堂々と罵ってくれたほうがまだましだ、と彼女は内心で呻いた。

「そうですね。クリスティナ様。よろしければ、お兄様と少し踊られてはいかがですか？」

「いえ、私は」

「身体を動かした方が気分も晴れるというものです。ねえ、お兄様。いかがでしょう」

善意の固まりといった笑顔で少女が言い、隣に立つ男もそれに鷹揚に頷いて言った。

「ああ、それはあるかもしれない。どうでしょう、クリスティナ様。もちろん、私などがお相手でよろしければですが……」

このように言われてまで断るのは無礼であるし、それにこのままの状態が続くよりはそちらのほうがまだ救いがあるように思えた。少なくとも、相手をするのが二人でなく、一人には減る。

彼女にしてみれば短絡的な判断で、クリスはそう決断した。室内に充滿する香りと鈍く続く頭痛の影響もあっただろう。

「……それでは、お相手していただけますでしょうか。マヒート様」
「喜んで。さ、どうぞ」

恭しく一礼した男が手を伸ばす。クリスは立ち上がり、手を預けかけて一瞬戸惑った。

日頃の鍛錬で傷とたこのできた指先は、自分でも美しいものには見えなかった。さきほどの二人の会話のやりとりが脳裡をかすめ、ふっという鼻息を聞いて顔を上げた先で、男が見下した笑みを口の端にたたえている。

薄く唇を噛み締め、彼女は男の手を取った。

剣とは、呼吸と間合い。そして礼儀である。

幼少時のクリスの記憶にある、それがまず始めに身体に叩き込まれた父からの指導だった。

呼吸とは自制。間合いとは相手との距離。礼儀とは相手への敬意。そして剣とは、アルスタ家の人間にとって自分自身に他ならない。つまりその三つはそのまま彼女の生き方でもあった。

よく自らを抑え、相手との適正な距離を心がけ、礼を逸しない。それがクリスティナ・アルスタという人間の根本である。彼女は今まで家訓に疑いを抱いたことなど一度もなく、むしろ誇ってその生き方を貫いてきた。

茶会や読書。人の輪を作って噂話に興を求めるより、ただ一心に剣を振るう。それが周囲の同性達とあまりに違う姿であることも、気にはならなかった。少なくともあの男に出会う前までは。

回転する視界のなかで男の顔を思い出す。彼が今、別の場所で他

の誰かと踊っている。そのことに気を取られたわけでは決してなかったはずだったが、

「――っ」

体勢を崩し、彼女はあと一步で転びそうなところをなんとか踏みとどまった。無意識によりかかってしまった胸板の上から、甘ったるい声が降ってくる。

「大丈夫ですか？ クリスティナ様」

クリスは険しい目つきで睨みつけるが、相手は動じない。全身に怒気がこもりそうになるのを抑え、彼女は自身の非礼をわびた。

「はい。……申し訳ありません、マヒート様」

「いえいえ、不慣れなことなどお気になさらず。楽しんで参りましたよう」

言って、男は柔らかな口調とは裏腹な強引さでダンスを再開した。

「……っ！」

あわててそれを追いかけるクリス。

彼女にとっては舞踏もまた呼吸と間合い、礼儀である。好みではないとはいえ、嗜みとして彼女も人並み程度には踊ってきた経験がある。身体を動かすことは不得手ではないし、そもそもこの場でいう踊りとはある程度以上の運動神経がなければ難しい類のものではない。

舞踏とは一組の男女が行うものである。その意味で、必要なものは確かに呼吸と間合い、礼儀であった。そして、その全てが今の彼女の相手からは徹底的に欠けていた。

リズム。挙動。目線。呼吸があう、あわない以前の問題である。男はまるで自伝に、弄ぶように彼女を自分の腕のなかで振り回していた。それでも崩壊せず、なんとか崖の一手手前で踏みとどまっている現状をむしろ褒めるべきであろう。呼吸を乱す。間合いを外す。模擬戦で幾度もそうした相手と剣を交わした経験を持つ、クリスな

らではといえた。

しかしそれにも限界があった。主導権は常にエスコートした男側にあり、上背も純粋な力でも相手には及ばない。先を読んで相手の稚気に対応し続けたとして、いつかコインの裏側をひきあててしまうのは必然である。

やがて、その時は訪れた。

「きゃっ」

男の強引な反転に腕が伸びきり、足が追いつかずに彼女はその場に倒れこんだ。

「ああっ。申し訳ありません、クリスティナ様……私が未熟なばかりに貴女にあわせることができず――」

彼女だけに語るのにはあきらかに大仰な声と仕草で男が言う。周囲の視線が集まり、踊りを続けながら人々が冷たい笑みを彼女に向けて閃かすのが視界をかすめた。

「舞踏が剣のようにいかなくても仕方ありませんな。……そろそろお休みになりますか？」

男のその言葉はしかし、むしろ彼女の闘志に火をつけた。

無言で立ち上がり、彼女は完璧な動作で一礼すると、もはや一分の隙もない表情で相手を見据えた。

「いいえ。どうかもう一度お相手いただけますか？ マヒート様」

彼女の気迫に一瞬、男がたじろぎ、虚勢の笑みを張って応じた。

彼女の手をとり、舞踊の開始を告げるため互いに頭を下げ、その余韻が終わらぬ間に強引に自分側へと引き寄せる。

男の姑息な奇襲を、しかしクリスは完全に見切っていた。一拍と一步を速めて見事に相手の側に自身を持っていく。驚きの表情を見せる男が次の動作に移る前に、彼女は流れのままさらに一步を踏み出した。

「っ！」

今まで引つ張る立場だったのが一転して逆の立場になり、男の顔が歪む。クリスはそれに冷笑で応じた。

そのまま彼女が先手を打ち続ければ、男は無様に床にはいつくばったことだろう。しかし彼女はそうしなかった。

踊りの主導権はあくまで相手側にある。受け手が強引に先導してしまつてはマナー違反だが、一步だけという彼女の行動ならその儀礼を逸してはいない。もつとも、例えそうだとしても転ばされることが侮辱であることには違いないし、それをわかりきったうえで手を抜かれるのも、また同様だった。それは挑発であるとともに、男の連動した行動を妨害する実質的な意味もあった。まさに間合いを外し、呼吸を乱させた上で形式上の儀礼も守った形である。

その意図のどこまでを読んだのか、憤怒の表情で男が動いた。腕の力だけで強引に彼女を振り回そうとするのを、彼女は余裕の体捌きで受けきつてみせる。

男のやってくることは、数としてそう多いわけではない。強引に振り回す。意図しないステップを踏む。たったそれだけである。クリスは純粹な反応の速度で前者に対応し、後者には今までの相手の癖を読むことと、頭に血を上らせ相手の意識を単純化することで、もとから分の悪いコインの裏表当てというリスクを最大限減じてみせた。力に逆らわず流れにのった一步で相手を攪乱し、連動した行動を防いでもいる。この舞踏を試合とするならば、攻防から心理戦に至るまで、全てクリスの勝利であった。

だが、彼女は事ここに至ってもあくまで受けきることを主眼に、決してそれ以上を求めてはいなかった。相手の面子を叩き潰すことではなく、相手の悪意に対して如何に正々堂々と自らの誇りを守ることしか頭にない。この場合、それはむしろ短所と呼ぶべきものだ

った。愚直そのものである。

誤算もあった。止まぬ頭痛と慣れぬ矯正具。それが最終的には彼女に敗北をもたらしした。

男の無理な先導と、それに反応するクリス。当然ながら彼らは他の男女とは勢いも動きの幅も違いすぎていた。剣の模擬戦のように周りに誰もいないわけではない。そのことが頭から抜け落ちていたわけではないにせよ、確かに彼女の注意力はその時、周囲から外れていたのである。

男が乱暴に腕を引っ張ろうとする、それに対抗するために大きく足を踏み出しかけたクリスは、その先に別の男女が親しげに踊っていることに気づき、とっさに身体を捻った。

普段の彼女なら、それでも最悪の事態は回避しえたかもしれない。しかし彼女の腰には矯正具がきつく巻かれ、深く呼吸することさえ疎外していた。彼女の肉体の持つ柔軟さは失われ、衝突を避けるためには無理な一步を踏むことしか選択肢にはなく。向かってくるこちらにようやく気づき、恐怖に顔を強張らせる名も知らぬ誰かの表情を瞳に映した瞬間、彼女の決意は固まった。

絹を裂く音があたりに響いた。

会場の音が止んだ。

それほど大きな転倒だった。周囲の誰もが踊るのをやめ何事かと注目している、その中央で息をきらした男が取り繕った笑みを引きつらせていた。

「……これは、これは。クリスティナ様、だからあれほど……無理はなされないほうがと——」

男の声など彼女の耳には入っていなかった。

彼女は呆然と、膝下から破れてしまったドレスを見つめていた。空色を濃く凝縮した蒼のドレス。母とファビオラがこの日のために用意してくれた。二人の笑みと、無骨者を見送ってくれた執事に女中達の顔までもが頭に浮かび、彼女の端正な顔を歪ませた。

惨めな気分だった。

転倒前にとった行動に悔いはない。誰かを突き飛ばして自らの安全をとる道は、誰よりもまず彼女が自身に誇れなかった。もし後悔があるとしたなら、それは男の安い挑発にのってしまったことだ。

やはり自分のようなものが社交の華を気取るべきではなかったのだ。社交嫌いの男。その供として、彼が苦手な部分は自分が役割を果たしてみせると粹がった拳句がこの様だ。頭に響く鈍痛が鋭さを増し、浅い呼吸で無理な運動を続けたせいか吐き気も催していた。泣きたくなるような思いで、ともすれば溢れそうになる自らの感情を必死に抑えこもうとしていた彼女の耳に、聞きなれた声が響いた。

「——音楽を。妖精の沈黙は、いまこの場所に訪れるべきものではないでしょう。どうか皆様、ご歓談をお続けください」

高くも低くもない、耳に心地よい声音はある意味、彼女にとって今この瞬間には最も聞きたくないものだった。

周囲に生まれる戸惑いの小波に対して無理な強制力のない自然さで、その声は続けた。

「沈黙よりも踊りましょう。今宵は新年の宴。この地の妖精にもそのほうがきつと喜ばしいはずです。さあ、音楽を」

やがて、静かな音色で円舞曲が流れ始めた。周囲の人々がそれにあわせ、動き始める空気を肌に感じる。一人顔を伏せたままにいる彼女の目の前に、誰かが立った。

「クリス。手を」

顔を上げる。見慣れた男の顔がそこにはあった。

二クラスはこちらの無様さを怒っても哀れんでもいなかった。いつものように感情の読めない、静かな瞳が彼女を見据えている。瞳にたまったものを必死に耐えて、彼女は差し出された手を取った。柔らかく引き上げられ、彼の元にひきこまれる。涙腺の決壊を堪えるのに努力が必要だった。

「や、やあ、二クラス。彼女は、これはその――」

彼女と対していた時の居丈だけさはどこへいったのか、男がどもりがちに言いかけるのを一瞥で封じ、二クラスが言った。

「こんばんは。マヒート。連れが世話になったみたいだ」

「いや……すまない、少し悪ふざけがすぎたかも、しれない」
にっこりと二クラスは微笑む。

「いいさ。ああ、そういえばマヒート、妹さんがブライに声をかけられていたみたいだったけど。様子を見にいつてみたほうがいいんじゃないか？」

名うての女たらしの名前を告げられ、男の顔面から血の気が失せた。挨拶もそこそこに逃げ出す相手を侮蔑の眼差しで見届ける気にもなれず、クリスは傍らに立つ男を見上げた。震えを隠した声で訊ねる。

「……ダンスの相手はすんだのか？」

「なんのことだ？」

男は眉をひそめた。

「水を持って帰ってきたらいなくなってるから、あちこち探してたんだぞ」

あの馬鹿兄妹。クリスは内心で毒づいた。

「なんだよ」

「なんでもない。……自分の間抜けさに呆れていたただけだ」

うかつにも程がある。虚言に惑わされ、ドレスまで駄目にしてしまった。家に帰ったら悲しがるだろう人達のことを思い、クリスは重く息を吐いた。

「もしかして、邪魔だったか？」

クリスはまつげを瞬かせた。男が放った言葉の意味が頭にゆっくりと浸透して、もう少して彼女は怒声をあげるところだった。

「それはなにかの冗談か？」

「……いや。そんなつもりはない」

二クラスはしごく真面目な表情で頬をかいている。からかっているわけではないことがわかり、彼女は大きく嘆息した。

「私はお前のそういうところが嫌いだ」

じろりと見る。男には動揺の気配もなく、そのことが一層彼女には腹立たしかった。

「そういうことを聞くな」

二クラスは顔をしかめ、子どものように唇を尖らせた。

「俺は魔法使いじゃない。聞かないと、わからない」

「察しろと言っている」

切り捨てて、彼女はもう一度息を吐いた。ひどく疲れていた。

まったく。とんだ歓宴会になった——その場を離れようと肩を落として歩き出し、連れが動きださないことに気づいた彼女は後ろを振り返りかけた。

「二クラス？ ……きゃっ」

引っ張られる。さっきの相手と違うことは、その後に柔らかく抱きとめられたことで、男の体温を至近に感じた彼女は心臓の鼓動を強くした。

「ちよつと。二クラス、何を——」

男は待たず、無言のままゆったりとステップを踏み始めた。連れの強引さに戸惑いながら、クリスもそれに併せて身体を寄せる。相手の腰に手を回し、怨じた上目で見た。

「いったいどうしたのだ」

「察してみた」

「……なに？」

男は淡々とした声音で告げた。

「戦には勝って帰るべきだと思う」

言葉に詰まる。確かに今の自分の顔を鏡で見れば、ひどく情けないものになっているだろう。このまま帰ったのではあれだけ応援してくれた家の者達にあわせる顔がない。しかし、だからといってこれはやや強引に過ぎるだろうと思えた。

「だが、ドレスが……」

彼女の美しいドレスは膝下からちぎれ、その下のペティコートが露になってしまっている。破れた裾を引きずりながらも、ゆっくりした動作なら転ぶことはないとはいえ、長くしなやかな脚がのぞく様子はあまり品のいいものではなかった。

「戦場で格好を気にするやつがいるか？」
二クラスが言う。

一瞬、自分の言ったことへのあてつけかと思い、彼の真っ直ぐな瞳を見てクリスはすぐにそれを否定した。そうではない。この男は、本当に彼なりに察してみただけなのだ。私が、クリスティナ・アルスタが何をもっとも大事にするか。そのために必要な行為はなにか。それに対する行動をとっている。

もちろん自分勝手には違いない。子どもじみてもいる。いや、大人じみた達観さであるかもしれない。出会ってから半年、男は彼女にとってわけがわからないままだった。

だが、不快ではない。感情の読めない表情も、つかみ所のない性格も突飛な行動もその強引さも。不快ではなかった。その理由について考えるのも、決して嫌なことではない。ただし恥ずかしさはあったから、彼女はいつものようにそのことに関しては深く考えずに、男の様々な感情を内包して混沌とした黒瞳を見透かすよう、薄く笑った。

「なるほど」

相手がそう言うてくれた以上、彼女に恥ずべきものはなかった。いつのまにかあれほどしつこく頭にこびりつくようだった痛みも既に遠く、晴れ晴れとした気配が全身を包んでいる。周囲の奇異の瞳

をものともせず、彼女は堂々と連れに身を預けた。その耳元に囁きが触れる。

「それとも、嫌か？」

「……ばか。だから聞くなど言っている」

くすぐったさに口元を綻ばせ、すぐに仏頂面に戻ってクリスは答えた。

「戦には勝つ。それだけだ。——いったいどれほど曲がかかるかはわからんがな」

「ワルツがロンドになったところで、気にはしないさ。なにせここは“妖精の地”だ」

「くだらんことを言う……」

甘さのないやりとりを交わしながら、二人は周囲にまじって踊り始めた。例え破れた衣服を身につけようと、自然と優雅なその姿に見惚れることこそあれ、眉をひそめる者はない。

宴の夜は更け、新年を迎えた妖精の地には灯りが煌々と闇を照らしている。大水陸で覇を争う貴族達の子弟は交流と策動に忙しく、黒々としたものを内に煮詰められたその場は決して見かけどおりの華やかさはなく、むしろ醜悪さの極まりでさえあった。

そんな中で、共に上級貴族と呼ばれる家柄に生まれ、異なる性格を持ちながら奇縁で巡り合った二人は、今はただお互いの呼吸を肌に感じて時を過ごしている。

時々、思いついたように言葉を交わす他は、互いに無言で身体を揺らすのみ。先ほどとはまるで違う、穏やかな居心地のよいリズムに身を任せながら、クリスは少しだけ迷い、それからほんの一握り分だけ、自身の距離を相手へと近づけた。

ひっそりと吐息を吐く。

あとしばらくの間だけ妖精がこの輪舞曲に飽きぬよう、彼女は心の中で祈った。

彼女が彼と別れる、一年以上前の夜の出来事だった。

1 (前書き)

本編の序編終了直後のお話になります。

――――。

声が、した。

意識の揺り籠の中に響き渡る音階に、少女は重さのない瞳を開いて目を覚ました。

まずはじめに感じたのは匂いだった。最初はあまりに心地がよすぎて逆に寝付けなかった、清潔なシーツの匂い。

陽の甘さを含んだ香りが鼻腔を満たすのにあわせてゆっくりと左右の焦点があう。視線は天井で像を結ばず、かわりに寝台につけられた天蓋の底が近かった。起き上がるのが困難なほど柔らかな寝台に横たわったまま、ふと眼に染みるものを感じてまぶたを閉じると、手に触れた頬が濡れている。目尻を拭わないまま、少女は身体を起こした。

室内にはすでに明るい日差しが入り込んでいた。採光に木窓を用いることが一般的なこの時代では珍しいことに、部屋の窓には透明な板が嵌め込められている。ここに来て初めて見たその不思議な物質が硝子という高価な代物であることを、彼女はこの屋敷に勤める人間から教わっていた。

やや厚さにむらがあるが充分に透明度の高いその向こう側に、よく晴れた外の景色が見える。密閉された窓からは砂も騒音も入り込まず、その場はとても静かだった。

――だから、聞こえたのだろうか。立ち上がり、彼女は室内用の足履きをつっかけて窓際へと向かった。

太陽の日差しがまだ柔らかい、時刻はまだ早朝といってよい頃だった。円状に広がる街の中央部に位置するこのあたりは市場などの喧騒から遠ざけられており、砂さえもここまでは届かない。黄土色に染まり、風と音が鳴り響く“外”とはまるで別世界のように白い街並みが、朝もやに静か佇んでいた。

外を歩く人影は少なかったが、窓の下に庭師の姿が見えた。庭園には色とりどりの植物があり、女中姿の女が甲斐甲斐しく水の世話をしていた。それは、この街の潤沢な水の在り様とこの屋敷の持ち主の地位を端的に示す光景であった。

扉を叩く音がして、彼女は窓から顔を向けた。

「……はい」

「失礼します」

扉の向こうから、黒の執事服に身を包んだ若い男が現れる。

「おはようございます、サリュ様」

彼女が返事をしなかったのは、“様”などつけて名前を呼ばれることにどうしても慣れないからである。やめてほしいと伝えたことがあったが、対する返答は簡潔だった。

「貴女は我が主の大事なお客様でございます。礼をもって接するのは当然のこと、どうかお気になさいますねよう」

にこりと口元を和らげる笑顔は柔和でも、その奥には決して退くことのない強情さが垣間見えていた。

黙然として頷くサリュへ微笑みを向けたまま、男は部屋の中に進み入ると、手に持っていた水差しを中央の卓の上へ置いた。

「朝食の準備が整っております。ご準備ができましたら一階へお越しください」

一礼と共に男が去り、サリュは水差しの水で顔を洗い、衣服を着替えてから部屋を出た。毎日新しいものを用意してもらっている、上質のシルクで織られた服装にもいまだ違和感が強い。一歩歩くごとにふわりと舞う軽さをたよりなく思いながら階段を降り、短い廊下を歩いた先でさきほどの男が彼女を待っていた。

男が扉を開けたその部屋の中央で、一人の人物が円卓に腰掛けている。

「おはよう」

彼女に向けられたのは薄い微笑だったが、それだけで人に与える印象ががらりと変わるほど、その女性の顔立ちは整っていた。同性なら誰も見惚れる黄金の長髪（長い髪を持つことはそれ自体、身分ある女性にしか出来ない）。鋭さと柔らかさを内包した体つき。ともすれば彫刻のように冷たい印象を与えかねない美貌に、それを穏やかに包み込む微笑と、隠し切れない疲れの色が見てとれる。彼女は先日この街で起きた騒動に対して、帝都から賓客としてトマスに滞在する身分でありながら、献身的に活動していた。

治安維持と街の修繕作業の監督。トマスを治めるベラウスギ公の配下の者には彼女の派手な――彼らにはそう見える行動に眉をひそめる者もいたが、金髪の女騎士は決して我を通さず、立場からすれば不満を抱いてもよいはずの下働きをまわされても不平一つこぼさず、それらに従事していた。

騒動の発端となった魔女裁判と、その後の騒ぎの中で彼女が見せた英雄的行動が噂になって流れていたこともあり、最近、街では彼女の名声が高まっていた。“帝都からの刺客”と揶揄される彼女をよく思わない者がいたとしても、そう邪険に扱うことの出来ない理

由もそこにあった。そうした様々な事情についてまでサリュは深く関知していなかったが、その女性が身を粉にして復興作業に励む理由については、知るところがあった。

二クラス・クライストフ。――リト。その人物の行方が途絶えてから、今日で一週間が経つ。一週間。ふと思いついた事実、その日数にサリュは愕然とした。もう、そんなにも日が過ぎてしまっているのだ。

「どうした、サリュ？」

「……いえ。おはようございます。クリスティナ、さん」

心の震えが身体に伝播するのを抑え込み、サリュは答えた。名前を呼ばれた女主人が、何かを思い出すような表情でわずかに苦笑した。

「そうか。なら、朝食にしよう」

頷き、サリュは彼女の対面に座った。

すぐに女中達が食事を運んでくる。上質な麦の粉を念入りに挽いたものを練り、竈で柔らかく焼き上げた練り物――パンと、水気をたっぷりも含んだ様々な野菜を手ごろな大きさに切り、あるいは千切って塩気を抑えたソースをかけたサラダ。それにミルクをじっくりと煮つめ、具材の旨味を抽出したスープ。それらは女性の社会的階級からすればむしろ質素に過ぎるほどの内容だったのだが、サリュにとっては充分以上に豪華な品々だった。

一見して高価なことがわかる陶器に盛られて目の前に置かれるそれらに、しかし彼女は手を伸ばさなかった。食欲がなかった。それはこの一週間ずっとのことである。気づかう視線に顔をあげると、女主人がわずかに眉を寄せていた。サリュはゆっくりと銀製のスプーンに手を伸ばし、スープをすくった。一口含むと、途端に芳醇な味わいが広がった。美味しい。とても美味しい。だが、それでも次

の手が進もうとはしなかった。

「……あまり無理はするな。何か果物を切って持って来させよう。スープだけでも、少しでも飲んでおいた方がいい」

絹のような金髪を揺らして女性が言った。サリュはうなだれて、その彼女の視線から逃れた。

サリュが女性からこの屋敷に来て初めて叱責らしき言葉を受けたのは、昨日の朝のことである。

「生きることは食べることだ。笑うためにも泣くためにも、人は食べなければならぬ。サリュ、戦場では誰もが泥をすすってでも剣を持つのだ。生きるために」

決して怒る口調ではなかった。むしろ悲しむような声だったが、その言われた中にあった一言が深く少女の胸に突き刺さった。生きるために。

——生きる。

声が耳元で囁き、顔を俯かせて服の裾を握り締める。主人の意を受けた女中が、すぐにサリュの前に瑞々しい果実を持ってきた。初めて目にする暖色の表皮と半透明な果肉を覗かせる果物をしばらく眺めるようにしてから、彼女はその一切れを手に取り、口に運んだ。柑橘系のよく冷えた酸っぱさが舌を縮こませた。後からほんのりとした甘みが口の中に溶け出してくる。砂石を飲み下すように嚥下して、彼女はさらに手を伸ばした。

幾つ食べても、果実の酸っぱさは舌に慣れなかった。泣き出しそうにも見える表情で果実を口にする少女を、金髪の女性が慈しみと愁いの帯びた表情で見守っている。

水陸最大の商業都市トマスを襲った暴動は、その直接の要因とは別に、元々この街の構造上むしろ発生は当然だったという説がある。

水陸の主要な街と結ばれた“唯一の水源”を中心に、円状に作られた街は中央へ向かうほど支配者層——貴族等の裕福な人々が住み、外縁になるほど貧しい被支配者層が集まっている。トマスは能力さえあれば生まれや立場に限らず成功を収める機会の与えられる街だったが、だからこそ能力の有無は際限なく両者の格差を広げ続けることにもなった。

能力と資産のあるものがそれを元手にさらなる富を得、それに失敗した者や抗うことのできない者は搾取される側として延々と労苦に苛まれることとなる。そして成功者は失敗者より常に少数、ほんの僅かにしか存在しないのだった。

没落した商家、その日暮らししかできない人々は羨望と尊敬の念で成功者を仰ぎ見ながら、同時に内心では嫉妬と悪意の炎が黒く燃え上がっている。件の騒動では、鬱積した思いがきっかけを得たことで爆発したのだろうと見られていたが、それを否定することは能力主義、成果主義をとるトマスの存在を否定することになるから、確かに避けようのない部分ではあった。

しかし、ツヴァイ建国から続く名門ベラウスギ公爵家の今代当主は、開祖ほどの先見性の有無まで持ち合わせているかどうかはともかく、充分に優れた政治的手腕の持ち主だった。

彼は暴動の波が一通り収まった後、すかさず治安の掌握と扇動者の確保に努める一方、備蓄された水と食糧を供出して被災者に分け与え、また暴動の中で発生した火災によって焼け出された家屋についてはベラウスギ家が責任をもって補償することを約束したのである。

トマスを拠点に活動する有名商家もこれに賛同し、率先して多額の寄付金を申し出た。日頃恨みを買うことの多い彼らにとってはその矛先を和らげる意味もなかったが、たったこれだけのことで周囲からの視線が変わるような甘えた夢想を抱いたわけでもなかった。彼らはこの事態を純粋な投資の機会と捉えていたのである。この街で成功を収め続けている人々には、確かにそれを裏付けるだけの理由があった。

街への被害は、多くは貧民街に起こっていた。もともとの建築強度が不足していたこともあるし、この星で珍しい移動しない街であるトマスの街並みは、特に貧しい地区を中心に古いものとなっていたのである。先日の火災はそれらを一掃した。それはつまり、建造の受容が爆発的に高まることも意味していた。

材料を扱う商人は受注と発注に忙しく走り回り、家一戸を立てるには大勢の人手が必要となる為、それまで仕事もなかった人々までが狩り出された。賃金を得た彼らは、それを元手にもう一度成り上がる機会を得たことになる。暴動を起こし、大きくした扇動者が早々に捕まったという発表もあり、街には笑顔と活気が溢れていた。

見事な対応だった。トマスの持つ構造的欠陥の根本的解決にはならないとはいえ、淀んでいた泥を一時的に駆除することに成功している。今回の件で最も得をしたのは、実はベラウスギ公爵ではないか——そう冗談まじりに囁く者がいるほど、公爵家の事後処理には手ぬかりがなかった。誰の仕業かはしらぬが、今頃その人物は地団太を踏んでいるだろうて。というのは、公爵配下の人物の言葉である。もちろん、暴動によって命をなくした人々が決して少数ではないことも確かな事実だったが。

祭りにも似た喧騒から離れた中央市街地の一角で、サリュはぼんやりと窓の外を眺めていた。職人による精巧な細作りの椅子に座ったその側にはさきほど起きたばかりの小さな砂虎が転がっていて、彼女の衣装の裾に向かってじゃれついてきている。まだ子犬ほどの大きさしかないその生き物は今がやんちゃの盛りだった。ミルクを零すくらいならまだしも質の良い調度品を壊すことも度々で、その度にサリュが叱りつけているのだが、この家の主人をはじめとした誰一人として、その砂虎を咎めようとする者はなかった。

「クアル」

ぎゃう、と律儀に鳴いて応える砂虎を抱え、顔を埋める。いくら湯水で洗っても消えない、砂の香りがした。じたばたと腕の中で暴れる子虎を床に放し、腹を見せて転がってみせる姿を見守って、つい口元を緩めかけた背後に寒々しさを覚えたサリュは部屋の中を見回した。

そこには誰もいない。当たり前前の事実少女の顔が歪んだ。ここは、静かで。広すぎる。

立ち上がり、部屋の隅にある棚机に向かう。そこには幾つかの道具が散逸していた。いずれも彼女が発見された時、側に落ちてあった品々だった。彼女に手持ちの私物などありはしなかったから、それらは全て旅の同行者であった人物の持ち物ということになる。その中で、サリュは見覚えのある物を幾つか手元に引き取らせてもらっていた。

所々の塗料が剥げてしまっている四角い立方体の玩具。厚手の羊皮紙と、恐らくその中身と合わせて使用するのだろう計りのような器具に、細長い棒が中央で小刻みに揺れている物もある。それから、本。水に濡れればいっぺんで駄目になるような品も少なくなかった。

が、それらが無事であったのは偶然の多大な作用はもちろん、元の持ち主の配慮の結果でもあった。可能な限り水を被らないよう、必要なものに処置が施してあったことを聞き、

「あいつらしい」

女当主はそう小さく笑った。

サリュは本を手にとった。彼女は字を知らないのです、中身を讀もうとしたわけではない。慎重に表紙を開くと、一輪の白い花が押されていた。

水気の抜けたそれは少しの風がそいだけで崩れそうなほど儂かった。皺の寄った花卉に潤いをもたらそうかというように雫が落ちる。水滴は、少女の瞳から流れていた。

本を傷めてしまうことを恐れ、サリュは慌てて表紙を閉じ、本から離れたところで存分に涙を流した。あの日以来、少女はよく泣くようになっていた。

必要なものがあればなんでも言うといい。という言葉付けを受けてはいたが、そう言われても思いつくものはなかった。クアルの為に必要なものと、クアルが迷惑をかけない為に必要なこと以外、サリュは何も希望を持たなかった。ただ男の生存を祈っていた。

身体にぽっかりと穴が空いている。空虚な感覚で、日がな一日部屋に閉じこもって過ごし、それでも時が経てば空腹を訴えてくる自分の肉体が彼女は不思議でならなかった。

家の人間達も、そんな少女に無理に干渉してくることはなかった。彼の家に勤める人々は誰もが優しく、彼女に対して親切でもあったが、あくまで自分達の職分を守り、それ以上を侵すことはなかった。

最もサリュを氣遣ってくれているのは、彼らの雇い主でもある女当主であることは間違いない。しかし、ひどく忙しい生活を送っているその人物と彼女が顔をあわせる機会はそう多くなかった。それでも女性は毎日の朝と夜、必ず食卓を共にとることを欠かさなかった。

「少し、身体を動かしてみてはどうだ？」

ある日の朝食の卓上、相変わらず食欲のない様子を見た女当主はそうサリュに提案した。小首をかしげる彼女に、

「私も昔から、何かあった時はそうしてきた。運動すれば気が晴れるし、少なくとも空腹にはなる――あくまで私の場合だが」

「……運動」

「外の空気を吸って歩いてみるだけでもいい。街を出歩くのは、まだ少し危ないかもしれない」

熱心に勧められ、サリュは自身より砂虎のことを考えた。そういえば、あまり外に出ていないからクアルも退屈しているかもしれない。最近、部屋で暴れているのはそのせいだったのかも。

少女がこくりと頷くのを見て、安堵したように金髪の女性は微笑んだ。

翌日、いつもより早く目覚めたサリュは砂虎を胸に抱えて部屋を出た。清掃中の女中達に頭を下げながら外へ向かい、適当に幾つかの扉を抜けると、低く乾いた空気が彼女を包んだ。

砂が遠く空気が澄んでいる。鮮明な視界に目を奪われて、サリュはしばらく立ち止まった。緑と花の彩り。訪れた後庭は色と香りに溢れていた。

いつも部屋から見下ろしていて、この場所の存在は知っていた。

しかし、実際に間近で目にしたのは初めてで、それは想像以上のものだった。

一帯にふんだんに水が巻かれ、季節の花が所狭しと咲き乱れている。絢爛な風情は彼女の故郷、今はもう砂に埋もれてしまった小さな集落では見たこともない光景だった。全てが茶色く塗りつぶされたあの場所に比べれば、まぶしくて目がつぶれてしまいそうになる。

裁ちバサミを持った年老いた庭師が現れ、怪訝そうに顔をしかめた。

「……おはよう」

「おはよう、ございます」

じろりとした視線を向けられ、少女の身体が強張った。老人は品定めするかのように彼女を眺めた後、そっけなく告げた。

「向こうだよ」

眉の形を疑問のそれにするのを見て、つつけんどんに言葉が足される。

「ご主人なら、向こうだ」

あごをしゃくった先へ、追いやられるようにサリュは向かった。建物の壁をまわり込み、開けた視界に見知った姿が入った。

金髪の女性が剣を振るっていた。長大な剣を正眼に構え、緩やかに天に伸ばし、一気に振りおろす。地面すれすれで止められた剣先が、踏みしめられた一歩とともに今度は振り上げられ、胸の高さで突きへと変化した。

決して舞のような華やかさはなかった。代わりにそれぞれが致命に至る重さを持っている。刃が鋭く空気を切り裂く音が耳に入るほど近づいたところで、剣を持った女性が気配に気づいた。

「――ああ。おはよう」

「おはようございます」

剣を止め、弾んだ息を落ち着かせる女性に訊ねられる。

「散歩か？」

「はい。お花を、見に」

「ああ――あれはちょっと凄いだろう？　庭師達が、気を遣ってくれているな」

「……目がくらみました」

正直な感想を告げると、嬉しそうに女当主は微笑んだ。

「そう言ってくれると皆も喜ぶ。この土地には馴染まないものも帝都から運んできてしまつて、苦勞して育ててくれているから」

サリュは訊ねた。

「クリスティナさんは……運動、ですか？」

剣を手にした女性が頷く。

「日課のようなものでな。鍛錬を一日でも休めば、身体がうずいてしまう。使用人達には呆れられているんだが」

サリュは目の前の女性の生業を思い出していた。女性は騎士だった。それがどういった存在であるかは、彼女自身の経験で知っている。

少女の視線は騎士の手に持つ剣に引き寄せられた。見ただけで重量感が窺える長剣には朝の薄い日差しに輝くような光沢はなく、硬質の存在感だけが浮き出ている。剣。騎士がその職責を果たす為に振るうその道具が、彼女にはひどく特別なものに見えた。

それが人殺しに用いられるものであることは承知している。しかし同時にそれは、何かを護る為の道具でもあるはずだった。

胸に抱いたクアルが鳴いた。その声に触発されるように、少女は口を開いた。

「――剣を、教えてもらえませんか」

少女の希望に、女性はかすかに眉を持ち上げただけで驚いた様子は見せなかった。

「どうして剣が要る？」

優しい声だったが、詰問するような響きを併せ持った台詞だった。視線をそらさずにサリュは答えた。

「この子を。守らないと」

胸の中の小さな生命は、少し前に失われるところだった。それを救ってくれたのは――彼女は、そう信じている――一人の男だった。その相手はもういない。腕の中で暴れるやんちゃな砂虎を、少女は自分の力で守り抜く必要があった。

「……そうか」

女性は嘆息するように言った。表情が少し困っているように見えたが、すぐに微笑を戻し、

「――持ってみるか？」

手渡された剣は、想像していた以上の重みを少女の手のひらに伝えた。

「馬上で用いる物だが、それでも一般的なものより軽くしてもらっている。もつとも、ある程度は重くなければ話にならないのだが」

剣を受け取り、女性はそれを上段に振りかざした。そのまま一気に振り下ろす。地面を穿つその直前で、剣先は止められた。ぴたりと制動してわずかにも流れない。

「私の家は武門の出だ。幼い頃から剣とともに過ごしてきた。堅苦しい精神論も色々とあるにはあるが――結局のところ、剣とは打つこと、止めることだ。相手を打ち果たすためには剣を突き入れねばならず、その剣を制御できなければ、切っ先が護ろうとしたものを

貫いてしまう」

少女が胸に抱く生き物に視線を落として、

「護りたいと思って、それを傷つけてしまう。ならいっそ、はじめから持たなければいい。サリュ、それでもお前には剣が必要か？」

女性の言葉は、わかるようなわからないようなあいまいな印象だった。はっきりしているのは、それが持った者の言葉であるということだ。だから彼女の答えは決まっていた。

迷いのない表情で頷く少女に、女性はもう一度小さく息を漏らし、言った。

「わかった。剣を教えよう」

次の日の朝、後庭を訪れたサリュに一本のナイフが渡された。

飾りの少ない、しかし柄まで精巧なつくりで少女のような人間にも一見して値打ちのあるものだとわかる。一般的な短剣類より鰐が大きいこと、彼女に気づかず、それよりもむしろ刀身の短さを疑問に思った。その表情を違う意味で捉えた女性が説明する口調で言う。

「短剣術は立派な護身の技だ。引きずって目立つ長剣などより、よほど役に立つ。アルスタ家に関わる者達の中にも、剣を振れない者はいっても短剣を扱えない者はいないからな」

少女は脳裏に彼女の知る人物の姿を思い出した。その相手も、確かに短剣を振るっていた。こっくりと頷く。

「では、始めよう。とはいっても、座学で教示できる性分でもないのだな。私はこんな形でしか教えられない」

言って、女性は自らも手に剣を持った。

昨日のものとは違う、やや小振りな剣だった。ちょうど長剣と短剣の中間にあるような長さで、幅広に伸びた刀身が調理に使う類の道具を少女に思い起こさせた。鰐がないのも彼女にそう思わせる要因だった。

鞘の役目を果たすのか幾重に布が巻かれている。ほとんど平べったい棒のように見えるそれを構え、金髪の女性は告げた。

「いいぞ」

少女は困惑した。

女性は剣を構え、鋭い視線を彼女に向けている。つまりは打つてこいということなのだろうが、しかし、刃物を手にしたことくらいはあっても、その扱い方について少女は全くの素人だった。どうすればよいだろうと手元に目を落とし、その瞬間に金髪の騎士が動いた。

手首を痛烈に打たれ、短刀が落ちる。静かな声で叱責が飛んだ。

「相手から決して注意をそらすな。視線を外す時もだ」

サリユは呆然とその声を聞き、痛みの走る右手を抱える。女性はそれ以上何も言わず、無言で少女がナイフを拾うのを待っているようだった。

屈みこんでナイフを拾う。適当に柄を握り前方に構え、一呼吸した。ふと、鞘に入ったままであることに気づき、その次の瞬間には少女は再び手首を打たれていた。

見上げると、金髪の女性はあくまで静かな双眸を向けている。

——後はその繰り返しだった。

結局、一度も短刀を振るうことができないまま、その日の鍛錬は終わった。

朝食の前に汗を拭いて着替えるよう、自室に戻された。痛む右手を使わず、女中が用意してくれた新しい衣服に何とか着替え終えると、計ったように扉を叩いて執事の男が姿を現した。

数え切れないほどの痛打を受けた少女の右手は赤く腫れあがっていた。それを見て、男がわずかに息を漏らした。

男は手に水の入った桶と布、そして深い碗を持っていた。碗の中からは強い香りが漂ってくる。なにかを磨り潰した液状のものが見

えた。

「湿布薬をご用意しました。お手をよろしいですか？」

桶につけ、よく絞られた布を手の甲にあてがわれると、凍るような冷たさが患部を包み込んだ。痛みはほとんどなかった。そのことに逆に違和感をおぼえて、彼女はわずかに顔をしかめた。

よく冷やされたあと、茶色と緑を捏ねた色合いをした粘着質の液体を塗りつけられる。薬は冷水の布をあてられた以上に冷やりとした感触を彼女に与えた。そこではじめて、少し痒みが生まれる。

「若干、痛痒いかと思いますが……我慢してください。皮膚に悪いものではなく、効能が染み込んでいる証拠です。アルスタ家に代々伝わる薬ですから、明日までには腫れもひいていくでしょう」

湿布薬の上から布をあて、その上を包帯で巻いていく。鮮やかな手際で男はすぐに処置を終えた。不自由さはあるが、必要最低限の拘束に留まっている。これなら物を持つこともできるだろう。

「ありがとうございます」

彼女が言うと、男は少し困ったように眉根を寄せた。

「驚かれましたか？」

少女は黙って首を振った。

そうですか、と顎を引く。立ち上がって、男は呟くように言った。

「昔、私がこの家で働くようになり一月ほど経った頃、同じように短剣を持たされました。相手は当時、執事長を務めていた初老の男性でした。全身を手ひどく打たれ、その日の夜は痛みでとても眠れませんでした。次の日からは仕事終わりに仕事の上役に打たれるようになりました」

不意に語りだした男を、少女は驚きの感情で見あげた。そうしたことは今までに一度もなかった。男は続ける。

「アルスタ家に仕える者なら誰もが受ける稽古だ、などと言われましたが、私にはとても信じられませんでした。男達はやにや笑っ

てましたからね。嫌がらせやいじめの類だろうと思い、打たれる日々が一週間続いたところで私は逃げ出しました。仕事もほっぱり出してお屋敷の裏で泣いていたら、叱りつける声が聞こえました」
懐かしむように口元がほころんだ。

「そこにいたのは私より年下くらいの小さな女の子でした。その女の子は言いました。泣くくらいなら、なぜその剣を振るわないのかと」

新しく現れた登場人物が誰のことか、彼女はすぐに察することができた。その表情や仕草すら、容易に想像できるような気がした。

「お前が持っているのはその為の物だろうと。悲嘆にくれて泣き寝入るくらいなら、それで相手を刺し殺してしまえばいい。そうしてお前はやっとなんかというものの重さがわかるのだと。そんなことははじめからわかっていて、できないのではなく、お前がお前の意思でそれをやらないだけというのなら。剣を持つ者は、決して泣いてはならないのだ――十にも満たない女の子がそんなことを言うのですよ」

「よく見れば、その子は私以上にボロボロでした。目元が少し赤かったようにも思えました。けれど、その子は決して泣いていませんでした。たとえ頬が濡れていても、絶対に認めなかったでしょう。ええ、確かにその方は泣いてはいなかったのですよ。あとで知りましたが、当家に生まれた者に幼少から課せられる鍛錬は、それはもう、私なら一日もたずに裸足で逃げ出すくらいのものであったそうです」

男が息を吐いた。慈しむような吐息だった。

「不器用な方々なのです。家も、人も。……とても」

「クリスティナさんとは、昔から――？」

男は首を振った。

「雑務役から家付きの使用人を経て、私がお嬢様のお側で働けるよ

うになったのはずっと後のことですから。覚えてもいらっしやらないでしょう」

話はそれで終わりという合図とばかりに、男はいつもの柔和な笑みを浮かべた。

「参りましょう。朝食の用意が整っております」

「はい。――あの」

呼びかけようとして、少女は男の名前を知らないことに気づいた。

「ありがとうございます。……お薬じゃなくて」

「お嬢様にはどうぞご内密に。主人も覚えていない昔のことを語る使用人など、煙たがられるだけです」

執事としての礼儀に、かすかにおかしみを含めた口調で男は言った。

食卓へ現れた少女の包帯に覆われた手を見ても、金髪の女性は少なくとも表向き、表情の筋肉をわずかにも動かすことはなかった。

それを平然と見届けるようにして、

「――おはよう」

「おはようございます」

いつもに比べて口調が素っ気ない。さっきの話を聞いていたから、その違和感はますますわかりやすかったのだが、傍に控えた執事の男がそ知らぬ顔をしていたから、サリュも何も気づかない振りをして席についた。

目の前には既に皮を剥かれ、食べやすいように切り分けられた果肉が皿に置かれていた。

「では、食べよう」

「はい」

朝食は無言のうちにすすんだ。

時々、女当主の気遣うような視線が注がれるのがわかった。少女が顔をあげると、あくまでさりげなさを装って視線が逸らされる。横に立つ執事の男が咳を払い、それにつられるように少女の口元も動いた。

「……どうした？」

怪訝そうに訊ねられるのに、首を振ってサリュは言った。

「お腹が空いてしまっただけ」

彼女の言葉に女性は瞳を瞬かせ、それから嬉しそうに笑み崩れた。「すぐに持ってきてささよう。私と同じものでもよいかな？」

「はい。お願いします」

サリュも同じように返す。表情にはかすかに微笑らしきものが浮かんでいた。

三度もある贅沢な食事以外。一日の間にある膨大な時間で、サリュは翌日の鍛錬について考えた。

どうすれば打たれないか。何が悪かったのか。かまってももらえずつまらなそうなクアルに服をひっぱられながら終日を費やして思考した結論を、彼女は次回の鍛錬でさっそく実践してみせた。

大きく、後ろに跳ぶ。

距離をあげ、金髪の女性の剣が届かない範囲に逃げる少女を見て、金髪の騎士はにっこりと微笑んだ。

「それが間合いだ。サリュ」

まっすぐに剣を持った腕を伸ばす。騎士の持つ剣先からさらに一本分の距離が少女との間に空いていた。

「剣とは硬い。長い。重い。自分は痛まず、相手を痛める。使う側にとってはそういうものだ。あくまで手の延長上にある便利な道具

に過ぎない故に、必ず届く範囲というものが存在する。持って扱うものは全てそうだ。槍も斧も。あとはそれぞれの癖による。形状や長さ、重さ。槍のように握る位置である程度の間合いを変えられるものもあれば、はじめから相手に防御されることを前提としたものもある。なにかしらの意図を持ってかたどられた、それを推測するのにも距離は重要だ」

一息に告げ、女性は小首を傾げた。それからどうすると、その瞳が訊いている。

サリュは目の前の相手を観察した。昨日はそんな余裕がなかった、その佇まいをしっかりと網膜に焼き付ける。やや右脚を後ろに引いた半身。片手に持った剣先がちょうど肩の高さにあるように構え、全体としてはとても自然な風に見える。その格好を、見よう見ままだに少女は模倣した。

不恰好に短剣を構えてみせる少女に、出来のよい生徒を見つめる教師の表情で騎士は頷き、

「――いくぞ」

一歩踏み出すのにあわせて、少女は退いた。もう一歩。さらに後退。すぐにらちがあかないことを悟った。ふと背後に壁が迫っている事に気づき、わずかに後ろに気を取られる。その失策にも気づいた。

二度目の注意はなかった。

無言のまま、間合いに入り込んだ相手からの一撃が振り下ろされる。少女はその剣を、右手に構えたナイフの根元で受けた。重い衝撃にそのまま弾かれる。布に包まれた剣先がしたたかに肩を打った。「人と剣の動きが線なら、打撃はその終着。点だ。人の身の重さに剣の重さが加わって集中するその一点同士がまともにぶつかれば当

然、重いほうが勝つ。サリュ。ほとんどの相手がお前より大きくて、重い。そのことを忘れるな」

苦悶の表情に歪めながら、声はあげずに少女は地面に落ちたナイフを拾った。無言で構えなおす。一息毎に肩の痛みを癒すようにしながら、頷いた。女性の言ったことなどほとんど頭に入っていないかったが、それでも返事を搾り出す。

「はい」

「点をずらせ。力は受け流せ。コツは、自分で掴むしかない」
「はい」

その日の鍛錬が終わるまでに、彼女はさらに二十を越える剣打を受けた。

手先から肘、肩までまんべんなく打たれ、鍛錬が終わるとすぐに執事の男が湿布薬を塗ってくれたが、さすがにその日の食事では右腕を持ち上げることすら難しかった。腕中をぐるぐると包帯巻きにした少女に、仏頂面を自らの表情に強要させた騎士が言った。

「明日からは左手で構えるといい」

冷淡に言い放ってから、気遣うように付け加える。

「……いつでも休んでいいんだぞ」

少女は首を振って、左手に持ったスプーンで食事を流し込んだ。昨日よりもさらに自然に、用意された食事は喉を通った。

部屋に戻ると、やんちゃな砂虎が部屋の中央に置かれた皿に頭を突っ込んでいた。周りにはミルクが飛び散っている。クアル、と呼びかけても顔を向けもしない相手にため息をついて、彼女は棚机に置かれたナイフを手を取った。

左手に構えてみる。右手の時よりもさらにぎこちなく思え、まぶたを閉じて庭先で見た女性の姿を思い浮かべる。眼差し、姿勢、右足と考えたところで、いまさらながらに女性が左手に剣を持っていたことを思い出した。食事中はスプーンを右で使っていたことも。

その意図はともかく、イメージは右手に構えたときよりも容易だった。騎士の動きを再現しようと、左足を踏み出す。同時に剣を打ち下ろし――何か違う。頭を捻り、女性の打撃が一步の着地とほとんど同時に行われていたことを思い出した。

線と、点。かすかに記憶の淵にひっかかっていた言葉を拾いあげる。あの女性は他に何を言っていただろう。ずらす。受け流す。抽象的な意味を掴めずに途方にくれ、何か考える手助けになるものはないかと部屋の中に視線を泳がせた。

彷徨った視線が部屋隅の棚机に止まり、それを振り切るように身体ごとそむけて、彼女はナイフを振るった。

なんの理解もないまま、闇雲に振り続ける。

少なくともその行為に没頭する間、誰かのことを忘れられるということに少女は気づいていた。

守りに入るから打たれるのだ。昨日の反省としてサリュはそう結論づけた。

自分に相手の剣を捌く技量がないのなら、逆に攻める。相手の剣が届かない——間合いの外れから一気に接近する。至近距離では剣を振れないはずだというまでの確信はまだ彼女にはなかったが、懐に入れば小さな武器の方が扱い易いだろうということくらいは想像できた。

翌日の鍛錬で、前方に構えた相手に、彼女は遠い距離から一気に駆けた。相手がわずかに眉を持ち上げるのを見ながら、自身の左側から回り込む。

鞘に入ったままのナイフを突き出す。——魔法のような出来事が起きた。

軽く目をみはった女性が左腕をたたみ、ナイフの刃先にあわせるように剣先を向け。次の瞬間には、少女のナイフが宙に跳ね飛ばされていった。しなるように刃が少女の首元に延び、寸前で止められる。無言のまま、女性は一步後ろに下がった。

いまだに目の前で起こったことがわからず、サリュは自分の手のひらを見つめた。手に痛みはない。打たれたわけではなかった。だが実際、彼女の手からは武器が失われている。いったい何が起きたのか。

確かめるために彼女は再び挑んだ。結果は同じだった。

さらに数回を繰り返し返して、ようやく少女は理解した。彼女の武器は、全て相手にからめとられているのだった。

刃に刃をあわせ、力を受け流し、適したタイミングと力と方向に向かって、一気に跳ね飛ばす。魔法のようなと表現するのにふさわしい、卓越した技量であった。しかし、ようやくそれがわかったところで、いったいどうすればよいというのか。

「アルスタ家の者は盾を持たない。遠い祖先が、そうだったらしくてな」

金髪の騎士が言った。

「盾を持つくらいならもう一本剣を持て——我が祖ながら、無茶なことと思うが。そこで、盾のような剣の扱いが生まれた。剣を持たない側からの攻撃、剣の間合いのなかに入られての攻撃。そうした場合に応じる為の技術。それが後に、幼い時からアルスタの者が学ぶ護剣術となった」

「それは組み打ちではない。故に重さはあまり論点にならない。力をずらし、かわすためにある。あるいは相手の懐に入るための。短い刃、大きな鐔はその為のものだ。私の持つものはまた少し違うが、サリュ、お前のそれがまさにそれだ」

少女は手に持ったナイフを見た。はじめはやや奇怪に見えた形状が、ようやくその意図を知って納得する。短い刀身と鐔の存在。あくまで实际的に用いられる為の、精緻でありながら無駄のないつくり。

「続けよう。さっきのはなかなかよかった。私の剣はお前より遠くに届き、近くでは振るいづらい。私の間とお前の間は異なる。後は、そこからどうするかだ」

騎士は講義を終え、剣を構えた。少女もそれに応えて短剣の柄を握り締める。

鍛錬が終わるまでに打たれた数は、昨日の半分ほどに減じた。

一日も経てば、右腕も動かせるように回復している。まだ肩より上に持ち上げることは難しいが、やはり利き腕が自由なままでは日常生活を送りづらい。代わりに剣を持って臨んだ左腕には新しい打撲が生まれたが、昨日ほど打たれはしなかったのでそう手ひどい有様ではなかった。

鍛錬の後、湿布薬を用意してくれていた男から処置を受ける間も、彼女は左手からナイフを離さなかった。鍛錬の間にわずかにだけあった幾つかの手ごたえを忘れぬよう、手のひらに染み込ませるかのような行いを見て、男は何かを言いかけたようだったが、結局は何も言わなかった。

食事を終え、部屋に戻ってもすぐにナイフを握る。脳裏に濃く残渣として在る女性の動き、それに対応するように自らの動きを何度も反復する、その少女の姿をつまらなそうに砂虎が眺めている。

毎朝、剣に打たれる日々が続いた。打撲の数は三日目の鍛錬で極端に減りはしたものの、それ以降はほとんど変わることがなかった。当然ながらサリュの方から反撃に成功した試しはない。

少女と騎士の技量は隔絶していた。それ自体は無理からぬことである。武門の生まれであり、幼い頃から鍛錬を続けてきたその騎士は、質量才全て少女より遠く天上にあった。誇りと血、そして日々のためまぬ努力が彼女をその域へと辿りつかせた。

一方の少女は剣を振り始めてまだ数日であり、才能以前の問題があった。騎士からの指摘にあったとおり、まず体格で劣っている。彼女は自身の正確な年齢を知らなかったが、恐らくは十代半ばから二十の間であろうことを考えれば、この時代の一般的な女性の身長よりもさらに彼女は小柄だった。生まれと生活の貧困さがそうさせ

た。身体を動かす能力に長けているわけでもなければ、小柄を生かす瞬発性もせいぜい人並み程度にしかなかった。

ただ一点、少女は決して考えることを止めなかった。どれほど打たれようとへこたれず、逃げ出さずに剣を握り続けた。その我慢強さもまた、生まれ育ちが関係している。あるいは、何かの経験と想いが。

彼女の深遠にたゆたう何者かの存在を知りつつ、彼女に接する周囲の人間はあえてそれに触れようとはしないでいる。

鍛錬を始めて一週間が過ぎた。その間、ただひたすら剣について考え続けた少女の執念が一つの結果を生んだ。

騎士が斜めから振り下ろした剣撃、その太刀筋を注意深く見極め、短剣をあわせる。直線的な軌道を読んで、刃にこすらせ——それが根元に届くや否やのところで、一気に手首を跳ね上げる。

乾いた音を立てて剣が弾かれた。

思わず、二人で目を合わせる。さきに表情を動かしたのは、相手の方だった。にっこりと笑う。

「——よく出来たな」

自分でも信じられない思いで、サリュは手元を見おろした。

少女が今やったことは、前に金髪の女性が見せたそれだった。相手の剣を受け、そのまま跳ね上げる。

「エルドと呼ぶ。受け流す、という意味だ」

騎士が言った。

「護剣の基礎で、ほとんど全てでもある。エルドで捌き、もう片方の剣で打つ。あるいは手にあるのが短剣だけなら、受け流したまま相手の懐に身を入れて、刺す。感覚を覚えているか？　なら、もう

一度だ」

とはいうものの、二度やれる自信はなかった。実際そのとおりで、それから何度剣を受けても、彼女は相手の剣を弾くことができなかった。落胆して肩を落とす少女に、慰めるような声がかかる。

「まあ、一度できただけでも大したものだ。それに、エルドというのはリスクも大きい。慣れないうちから無理に狙うのは控えたほうがいい」

詳しい説明を求めて顔を上げる少女に頷いて、

「足で距離をつめ、腰に重さをのせ、肩が角度を測り、手首を添える。この一連の動きが剣だとするなら、エルドは手首の段階で“跳ね”させるわけだからな。相手の剣の動きを見極めた上でなければ、相手の重さを全て手首で受け止めることになりかねない。無茶なやり方では手首を傷めるだけだ」

特に相手が手だれの場合にはな、と続ける。

「直線的な軌道で打ってきてくれることなど稀だ。ただひたすら相手の剣を捌き、機会を待つ必要がある」

わかるようで、よくわからない。そんなふうな少女の表情を見て女性は小さく笑った。

「やってみせよう」

剣を構えた相手に、サリユもナイフを構える。行くぞ、という声とともに、女性が踏み込んだ。先ほど少女が偶然に受け流しを成功させた時と同じ、斜め上からの打ち下ろし。あわせて少女も短刀を向け、両者の刃があう寸前。女性の剣が軌道を変えた。

「……っ」

鞭のようにしなり、そのまま少女の腕をかいくぐって喉元まであてられた剣に、彼女は声もなかった。

「こういう風にな」

刃先をあわせるといふ、ただそれだけのことすらが至難。今まで
はただ相手が限りなく手を抜き、刃をあててくれていたのだと少女
は悟った。考えてみれば当たり前のことではあったが。

悔しさはなかった。うぬぼれるような傲慢な思いなどそもそも持
ち合わせていない。ただし、先ほどの成功もその為だったのかとい
う気持ちは少しあった。

女性は気休めの言葉は使わなかった。彼女という人物はそうした
行為を好まない。

「今日はおしまいにしよう。それとも、もう少し続けるか？」

騎士は言った。聞きながらにして既に答えを知る者の表情だった。

鍛錬が再開された。

朝食を終え、心地よい疲労をひきずりながらサリュは部屋に戻っ
ていた。最近では痛みは腕に集中せず、全身に散っている。その分、
鍛錬後に塗られる湿布の匂いも身体のアチこちからするようになって
しまったが、その強烈な香りにもいい加減に慣れた頃だった。

人間よりよほど鼻の利くクアルにはひどく不評だったが。この薬
の効能は身をもって知っていたから、彼にはもうしばらくの間、な
んとか我慢してもらうしかない。最近嫌がるのであまり抱き上げ
てもいけないことを思い出しながら、部屋の扉を開けた。視線がすぐ
に砂虎の姿を探す。眉が寄った。

「クアル？」

部屋の中央にミルクの入っていた平皿があり、周囲はいつものよ
うに飛び跳ねた中身で汚れている。しかし、肝心の砂虎の姿がな
かった。

「――クアル」

お腹一杯にミルクを飲み、どこかで眠りこけているのだろうか。寝台の下や棚の向こうなど、丸まった姿を探して部屋の中を歩き回り、呼びかける少女の声に徐々に不安の色が交じった。

「クアル……っ」

返事はない。しまいには大きく声を荒げ、それでもしんと静まり返ったままの室内の気配に、ようやく彼女は砂虎の不在を認めた。廊下へと飛び出す。どこに向かっているかもわからずに屋内を駆けた。

廊下の女中達が、驚きの視線を向けてくる。構う余裕もなく、少女はひたすらに駆け続けた。いない。いなくなる。――嫌だ。

「サリュ様」

目の前に執事の男が現れた。脇をすり抜けようとしたところを肩をつかまれて引き止められる。

「どうかなさいましたか？」

「クアルが……っ」

気が動転していた彼女はそれ以外の言葉を言えなかったが、それだけで男は事態を把握したようだった。目を細め、落ち着いた口調で確認してくる。

「お部屋には、いないのですか」

こくりと頷く。拘束から逃れようと暴れたが、肩に置かれた男の手はぴくりともしなかった。

「……わかりました。すぐに人を使って探させます。サリュ様は、一度部屋に戻りましょう。もしかしたら何か見落としているかもしれません」

そんなことをしてる暇はない。さらに暴れようと身をよじらせるサリュへ、男はたしなめる声で言った。

「落ち着いてください。わけのわからないまま走り回っても、砂虎は見つかりません」

男の言葉に諭されたというよりは、疾走直後に暴れ続けた身体の限界がきて、少女は動きを止めた。目の前に岩のように立ちふさがり男を睨みつけ、頷く。廊下を通りすがった女中に声をかけ、先導する男に手を引かれながら部屋へ戻った。

部屋にはやはり、クアルの姿はなかった。ぐらりと周囲を見回した男が少女を振り向く。

「最後にあの砂虎を見かけたのはいつですか？」

「……朝ご飯に。出かける前、です」

「家の者がミルクを持ってきたのはその時ですね」
首を縦に振る。

「部屋を出る時、扉はしっかりしていましたか？」

少し考えてから、サリュは頷いた。

「となると、どこから出たかが問題になりますが……」

廊下から何人かの女中がやってきた。男が彼女達に指示を出す間、彼女はミルクの名残が残る床の平皿を見つめていた。いったい、どうして。湿布薬の匂いがそんなにも嫌だったのか、それとも。ふと、抱き上げるどころか、最近ほとんどクアルと接していなかったことを思い出した。ずっと剣のことばかり考えていた。いや、そうではない。考えていたというより、むしろ。

「これから屋敷の搜索にあたります。お手伝い頂けますか？」

思考は男の声に遮られた。

もちろん、彼女に否などあろうはずがない。足早に廊下に行く男の後ろを、強張った表情で少女はついていった。

「クアル――」

遠く青色に佩けた空へと吸い込まれ、散る。かすかな残響が失われる前に、サリュは再度肺を膨らませ、呼びかける声を放った。

「クアル——っ」

休みなく張り上げ続けているせいで声音はすでにしわがれかけていたが、どれほど喉が痛んでも少女には気にならなかった。例え喉がつぶれても、そんなことはクアルがいなくなることに比べれば些細なことだった。一人きりになってしまふという、その恐怖よりは。

彼女の頭にあったのは、先日の記憶である。幾ら呼びかけても応えてくれない誰か。そのまま、相手は自分の前からいなくなってしまう。

視界が滲んだ。咽の痛みからくるものではないのは明白だった。私はなんて馬鹿なんだろうと少女は嘆いた。彼女が剣を習ったのは、小さな砂虎を自分の力で護るためのもののはずだった。騎士の女性と言った。剣を持つことで護りたいものを傷つけてしまうことがあると。

しかし、今回の件はそれ以前の問題だった。剣で傷つけるどころではなく——彼女の剣は、砂虎を向いていなかったのだから。護るための剣などではなかった。ならば何の為に、というその解答も既に彼女は自分の中で導き出している。だからこそ、自らの愚かしさが悔やまれるのだった。

「クアル！」

がさりと庭先の花壇が揺れた気がして、駆け寄る。棘が刺さるのも気にせず掻き分けても、そこに砂虎の姿はなかった。

「……サリュ様」

男の声に、振り向いた少女の顔は朗報への期待に満ちている。しかし、若い男の表情にあったのはいつものように平静な表情だった。「屋敷勤めの者から、話がありました。シーツの取替えにお部屋に入った際、扉を開けていた瞬間があったかもしれない。その者が出る際、少なくとも姿を見たおぼえはないということでしたので――その間に、外に出てしまった可能性が高いと思われます」

そんなことはとうにわかっていることだ。

言いかけて、彼女は気づいた。男の視線はそれ以上のことを告げていた。

「……外」

屋敷の、外。

「……あくまで、可能性ですが。どこから出ていってしまったのかかもしれません」

サリュは血の気が引くのを感じた。

砂虎は危険な生き物だとして広く認知されている。この屋敷では金髪の女性の好意で厚く遇してもらっているが、外でクアルが見つければどんな扱いを受けるかは想像に難くなかった。まず間違いく、殺されてしまう。

走りだそうとしたサリュを、肩に置かれた男の手が押しとどめた。

「放してくださいっ」

「できかねます。先日の騒動は落ち着いたとはいえ、あなたのことを覚えている街の人間がいる恐れは高い。今はまだ、屋敷の外に出るのは危険なのです」

「私なら、平気です……!」

必死な表情で少女は言ったが、男の態度は頑迷だった。

「申し訳ありません。あなたの身の安全を必ず守るようにと、主から言い付かっておりますので」

少女の言葉は受け入れられず、男は近くの女中を呼び止めた。

「クアル様は必ず、我々が見つけ出します。どうかお部屋でお待ちになっていてください。――貴方達、サリュ様をお連れしてください」

男の言葉と視線の意味を察したように、女中達は深く頭を下げた。二人の女中に左右を挟まれ、サリュは屋敷の中へと戻された。隙を見て逃げ出そうと試みるが、すぐに回り込まれてしまう。女中たちの所作はそれぞれ素人のものではなかった。

無駄な反抗は相手の警戒を強めるだけだ。現時点での行動を諦め、うつむきがちに廊下を歩きながら少女は頭の中で必死に手段を講じていた。周囲に悟られないよう注意深く視線を四方へと配り、屋敷の構造や女中達の配置を目にやきつける。手の空いた人間は砂虎を探しに出てくれているのだろう。館の中にはあまり人が残っていないらしかった。

「……何かありましたらすぐにご報告いたします。こちらにてお待ちくださいませ」

部屋に戻ると、丁重な礼とともに女中達は去った。少女はすぐに扉へと近づき耳をそばだてる。気配はないが、扉の前に誰かが立っていないとは思えない。ここから出ていくことは難しいだろうと考えた。

それなら、どうするか――部屋の中央に戻り、机の上のナイフをとって、少女は顔を上げた。視線の先では硝子窓が白々とした日光を透過させている。

白磁の町並みをサリュは駆けていた。

全身を包む大外套を羽織っている。道行く人々が顔をしかめる程度にはその外見は目立っていたが、わざわざ声をかけて呼び止めるものはなかった。

トマス中央に居を構えるのは裕福層であり、貴族や商家が中心となる。そうした家々では例外なく使用人の服装にも気を遣われる為、彼女のような身なりをした者はまず外からの迷い子であろうと考えられているのだった。

実際には、彼女のような姿を見かけることがないわけではない。ただしそうした場合も時間帯は限られていた。朝夕に多くあるそれらの訪問者が、個人ではないという点でも今の少女とはあきらかに異なっている。

周囲の奇異の視線をものともせず、駆ける。大声で砂虎を呼ぶ声をあげたいところだが、さすがにそれでは人の目を引きすぎる。自らの立場についての自覚はあったから、彼女は衝動を殺し、懸命に走りながら道端の隅々へと目を凝らしていた。

外に出たクアルが見つかったらどうなるか。間違いなく騒ぎになるだろう。そこには人が集まっているなりなんりの騒動が起きているはずだ。街中を走っていれば、そうしたところにでくわすかもしれない。

では、まだ見つかっていなかった場合には。その時は砂虎が物陰に隠れているという可能性が高い。少なくとも大通りに悠々と姿を見せて、いつまでも人の目に見つからないのは難しいだろう。

大通りを駆けながら、砂虎が隠れられるだろう場所を彼女は探した。

一件一件の屋敷がそれぞれ土地を広く扱い、遊びの空間にも恵まれた中央区の建築物群には、いわゆる路地裏と呼ばれるような箇所は多くない。一つの屋敷のなかにあるそうした隙間に紛れてしまっただけではないが、そうした場所には少女の身分では入り込めない。探索が不可能である以上、それに心を囚われていても仕方なかった。極めて冷静に、彼女は自分にできることを選択していた。

やがて、少女の足が止まったのは、中央区の外れ、裕福層と一般層を分け隔てるように立ち並んだ店棚の連なる通りである。市場だった。

それなりの貴族や商家であれば、毎日の食料品や生活に費やされる細々としたどんなものの扱い、その仕入れにももちろんつきあいというものが存在する。契約を交わし、特別な受発注を経て直接運び込まれる為、家の者が露店に直接出向き、そこで自ら目利きをしながらい物をするようなことは稀だった。

しかし、店側としてもそうした大貴族、大商家だけを相手にした商売が全てではない。商人という職業人が宿命としてあわせもつ業に正しく、彼らはみな現実的で、功利高かった。

上層地区の近くで「某家、御用達」という煽り文句を掲げながら商われる数々は、多くの人々の目をひいた。高貴な者に憧れ、彼らの生活の一端にでも触れたがるのは人の性でもある。トマスという成功と挑戦の街で、それらは明日は我が身という両面ある現実を、肯定的な希望として信じるために有効な手段でもあった。

故に、下層や一般層にあるそれと同じく、その市場が賑わいをみ

せることは必然といえる。そこを舞台とした多くの成功談もあった。つまり市場とは、トマスという商業の街の持つ光と影の象徴なのだった。

活気に溢れたその場所に立ち、サリュははじめてこの街を訪れた時に似た感想を抱いた。視界を埋める人と、その顔にある悲喜交々の表情。響き渡る歓声と怒声。上層地区のゆるやかな一画で半ば隔離されたように穏やかな数日を過ごした少女は、視界の光景に屋敷で見た絢爛華麗な花壇の時と同じような、目もくらむ思いをおぼえた。

小船の上のように不安定な心地を靴裏に感じ、しかしサリュはその場に踏ん張った。トマスに到着した日、彼女の側には彼女以外の人物がいた。迷いかけた自分をみかねて手をつないでくれた。その人物は、今いないのだから。少女は一人でこの人の洪水に立ち向かう必要があった。

顔を上げ、一步を踏み出す。大外套を目深に被りなおした。

こうまで人が多ければ、足元まで注意を払う人間は少ないだろう。何かのおこぼれを狙った砂虎がどこかにまぎれこんでいる可能性は少なくなかった。慎重な態度と油断のない視線を周囲に向け、少女は足を進めた。

ことさらにいうまでもなく、トマスはバーミリア水陸においてもっとも栄えた街の一つである。

水路と陸路を介して運び込まれ、またそこから送り出される交易品の質量はまさにその街が水陸流通の中心であることを示していた。大商家ともなれば一国の王をも凌駕する財貨を蓄え、それがまたさらなる成功を呼び込む糧となる。トマスを危険視する声は帝国首都

ヴァルガードに常にあつたが、それも仕方ない現実が確かにあつた。

トマスの気風は自由な在り方にある。もちろんしきたりや制約といったものが全くないわけではなかったが、古い慣習や金にもならない道徳などにはほとんど価値が認められていなかった。トマスという街を支え、形作る商売人たちの志向がそうした風土を生んだ。

自由は膨張し、暴走する。ともすれば崩壊をも招きかねないそれが、トマスにない——少なくとも、表面上そう見えないのには、そこに住む人々の多大な努力があつた。自由と無制限とは異なる概念である。慣習や道徳を極力重視しない姿勢は、何をするのも勝手という傲慢を許すものではなかった。トマスの人々は、そうした行為を防ぐためにそれぞれの業種、立場で話し合いをもち、協定を結んだ。その結果、生まれたものが組合と呼ばれる組織概念である。

組合は大から小まで幅広く、その種類は多岐に渡った。トマスを治めるベラウスギ公爵家を中心とした、大商家がその名を並べる支配者達の組合から、それぞれ職人達の組合。光ある故に必ず存在する、闇——慈悲を求めて路上をさすらう物乞いにすらそうした組織はあつた。

彼らは他の組合連中のように、堂々と館をかまえ、書面に所属する人間の名を記して体制を維持するようなことはなかったが、実態としては全く同様のものではあつた。得られる利益の配分と、もめごとの仲裁。その二つである。

文字に記された名前ではなくその容姿で所属の有る無しを判断し、彼らは縄張りを荒らす者を許さなかった。新たに敗者の列に加わるなら、まずはその中での礼儀を知るべきだった。それすら出来ないものは、そこからものはじきだされてしまう。

今、大外套に身を包んで市場を歩く一人の少女が、そうした彼女らにとって不快な新参者と見られてしまったのは無理からぬことである。数名の薄汚れた男達が、彼女の前に立ちはだかった。

敵意に満ちた視線で見下ろされ、少女は身体を強張らせた。脳裏には、暴徒と化した集団に追われた記憶が蘇っている。――魔女を殺せ。

「……なにか」

瞳が相手に見えぬよう、顔を伏せるようにした声に、乱暴な言葉が返された。

「お前。どこのもんだ」

「どこ、とは？」

「ここは今日、うちの縄張りなんだよ」

沈黙し、理解の及ばないうちに少女は気づいた。誤解を受けている。

「私は、探し物をしているだけで。ご迷惑をかけるつもりはありません」

男達が顔を見合わせた。

「探し物ってのは、なんだ」

「……猫です」

砂虎というわけにもいかず、彼女は愛玩用として知られるその小型の生物の名をあげた。前に、そういう風な物言いを聞いたことがあった。

それを聞いた男達はもう一度互いの視線を絡ませ、一斉に笑い出した。

「猫って。お前、そんななりでペットでも飼ってんのか」

「いやいや。食料のつもりかしらんど。あんがい、もうそこらへんで捌かれてるかもな」

下卑た笑いを起こす男達に、少女は黙したまま反応を返さなかった。猫を飼うという行為が上流階級に許された贅沢だという常識を知らなかったし、仮に知っていたとしても反論したところで何も得られるものはないだろうことは判っていた。

サリュは顔を俯かせたまま、男達の脇を通り過ぎた。その背中に声がかかる。

「待ちな」

笑いを収めた男達は、口元を醜悪な形に歪めていた。獲物を前にして、露骨にいたぶるような表情だった。トマスという街の在りようは決して楽園ではなかった。強者と弱者をつくり、弱者はさらに弱者を求める。

「言っただろ。ここは今、俺らの縄張りなのさ」

少女が言葉の意味を理解していないことを悟り、隣の男がわざとらしく続けた。

「通りたければ、通行料を払ってもらわねえとな」

もちろん、そんなものを払う必要があるはずがない。難癖をつけられていることを悟り、少女は注意深く周囲の様子をうかがった。

砂虎を探して市場の外れに足を向けたのがまずかった。人通りはあるが、誰もこちらにまでは注意を払っていない。大声をあげれば、注目を浴びることは容易いが――それで物事が解決するかはわからないし、クアルを探せなくなってしまってもまずい。

「すみません。お金は、持っていないくて」

せいぜい穩便に事を治められないかと、少女は頭をさげたが、

「なら、ブツだ。何かあるだろうよ。とりあえず、そのマントの中心を見せてもらおうか」

傲慢な物言いにそれが不可能だと理解した。

それならばと、胸元へと腕を伸ばしてくる男に少女は迷いなく懐の短刀を抜き出した。突きつけられた切っ先に目を見開き、しかしすぐに男達は笑みを取り戻す。

「おいおい、物騒だねえ」

「いいナイフじゃねえか。慣れないことはしねえほうがいいぜ、坊主」

「……どいてください。騒ぎを起こしたくは、ありません」

その台詞はむしろ失策だった。彼女から騒ぎを大きくすることは無いという事実を、男達に伝えてしまっている。男達はまるで怯まず、取り囲むように仲間同士の間隔を広げた。

「勘違いすんなって。お前の探し物を手伝ってやるのによ」

「そうそう。猫だったか？ 一緒に探してやるさ。なあに、ちいつと御代をもらえれば、それで——」

男の言葉が終わらないうちに、サリュは身を翻した。全速力で走る。男達の怒号を背中に聞いた。

人の密集した空間は、彼女の小柄な体軀でもとても全力で抜けられるものではなかった。道行く買い物客と次々にぶつかり、非難の声を聞きながら少女は市場を駆け抜けた。出口を探して走るが、土地勘のない彼女にはまるでどちらへ進めばいいか見当がつかない。

程なくして、彼女は袋小路に追い詰められた。三人の男が、息を切らしながら立ち尽くした彼女を笑う。

「追いかけてこはしまいかい」

その手に得物が握られている。ナイフが二人に、一人は中に何か詰められているらしい細長い布袋を下げていた。

「痛い目にはあいたくねえだろ？ 大人しく——」

少女は躊躇しなかった。彼女が数日の剣の鍛錬で学んだことは、まず先手必勝ということだった。

地を走り、左端の男へと掛かる。その手に持った布の棒のようなものへ刃を向け、確かな感触を覚えた。切り裂かれた袋から中身の砂が流れ落ちた。

「てめえ！」

怒号とともに、男達が襲い掛かる。

それは決して連動した動きではなかった。だが、その隙を突くような技術も経験も少女にはない。路地裏は二人が同時に掛かるには狭かったが、その狭さが逆に少女が男達の脇を抜ける行為を疎外していた。

一人目の男のナイフを、軽くいなす――騎士のそれと比べれば、まるで眠ったような打ち下ろしだった――しかし、その後の行動が続かない。少女の非力な体格では、体ごと男にぶつかったところで相手の態勢を崩せもしなかった。つまり、取り得る行為は一つしか残されていない。

――刺す。一瞬、少女は迷った。だらしなく開かれた男の懐へ入り込まず、そのまま男の脚を切りつけた。悲鳴があがる。声にわずかに少女の体が強張ったところへ二人目の男が飛び掛った。

「このクソガキ！」

強引に伸ばされた腕に突き飛ばされ、彼女はあっけなく吹き飛んだ。煉瓦壁に後頭部を打ち、一瞬、視界がぶれる。はっと意識を戻したときには、腕を振り上げた男の凶悪な顔が視界いっぱいに広がっていた。

反射的にサリュは両腕で己が身をかばった。その上から、叩きつけるような拳がおろされる。重さをずらせず、まともに受けた力は

簡単に少女の身体を今度は横へと跳ね飛ばした。

息が詰まる。地面を転がり、数転して世界が平衡を取り戻す。立ち上がるうとする腕に力が入らず、歯を食いしばって顔をあげた先に靴底があった。

「あうっ……！」

踏みつけられた頭が地面を擦り、ざらりとした感触が耳に響いた。

「ガキが、なめた真似を——」

「おい、殺すなよ。ここじゃ人目につきすぎる」

「わかってるさ。さっさとそれ、拾って来やがれ」

少女が落とした短刀を拾い上げ、男は目を細めて口笛を吹いた。

「おい、見ろよ。とんでもねえ上物だぜ。そいつ、どこかの貴族の坊ちゃんなんじゃ」

「馬鹿が、そんなわけがあるか。どうせ盗みにでも入ったんだろうぜ。……おい、坊主。他にも何か持ってやがるな。これ以上痛い目にあいくなかったら、さっさと出した方が身のためだぜ」

外套ごと髪を掴み、持ち上げる。少女の奇妙な瞳孔を見た男が驚きに顔を歪めた。

「お前——」

一瞬の隙を逃さず、獣のように少女は跳ねた。ぶちりと捕まれた頭髮が千切れる音を聞きながら、強引に男へ身体をぶつける。尻餅をつく相手からの反動を利用して立ち上がり、サリュは周囲を取り囲む男達へ刺すような視線を放った。

外套が外れ、銀髪にも似た灰色の髪があらわになっている。その下にある面立ちを見た男達が目を見開いた。

「ガキかと思ったら、女か！」

「それより、そいつの目を見ろよ」

瞳孔に円の描かれた奇怪な双眸。思い出したように、一人の男が首を振った。

「そういえば——こないだあった騒ぎで、魔女だって言われてたヤツがいたな。そいつじゃねえか？」

「ハッ、まんまと生き延びてたってわけだ。あれのせいで火に焼かれて死んだ仲間も多いっていうのに、大したもんだな」

「いや、待て。しかしこれはいいぜ」

二人の仲間の言葉をひきとって、男が醜悪な表情をひけらかせた。右手に持つ、もはや用途をなさない布切れを捨て去り、

「本当にそいつが魔女だってんなら、関わりたくもねえが。顔は悪くねえ。大枚はたいて飼おうって物好きがいるかもしれねえぞ」

「ちつとばかり、肉がなさすぎるがな……。まあ、そういうのが趣味って連中もいるか」

「そういうことだ。傷をつけるんじゃないやあねえぞ」

にじり寄る男達へ少女は追い込まれた砂虎のように反応した。唸り声こそあげなかったものの、歯を剥き、身を低くして構える。しかしそれも、先ほど受けた一撃が彼女の足元を揺らしていたから、傍目には強がりが見え透いていた。

それをはっきりと認識して、男達の態度には余裕と侮りの色が強い。少女の手からはもはやナイフも失われていたから当然ではあった。

物陰から影が飛んだ。それを視界の端に捉えた瞬間、少女も動いていた。

先頭に立つ男の右手に、小さな砂虎が噛み付いている。慌てて振り上げた男の手からナイフが漏れ、それが地面に落ちる前に彼女はそこに滑り込んでいる。柄を掴み、今度は迷わずにサリュは男の太

ももへそれを突き立てた。

絶叫が轟いた。

耳をつんざくそれを聞きながら、すぐに少女は距離をとった。全身を怒らせた男が向かってくる。その斜め後ろに、もう一人。しかし同時には掛かってこれない。

彼女と同じく飛びのいた砂虎が、地を這うように駆けた。グアル、と小さな体躯で精一杯に咆哮しながら、注意を引きつける。子どもとはいえ猛獣の気配が男の注意を反らし、その合間を縫って少女は再び一気に距離を詰めた。

血に濡れた刃が見える。それが彼女の意識を鈍らせることがあっても、それも一瞬のことだった。耳元で騎士の言葉が響く。剣とは結局、打つものだ。

全身の力を込めて、彼女は手にある凶器を打ち刺した。悲鳴。すぐにナイフを抜こうとして、手だけがすっぽぬけた。手のひらが赤に染まっていることに、はじめて彼女は気づいた。

「この野郎！」

顔を上げる。殺意をまとった男が右手にナイフを振りかざしていた。回避の動作は間に合わない。両手に武器はなかった。どこか冷静な思考で、全ての行動が間に合わないことを少女が悟り、

「――失礼」

見知った男の声が静かにその場に響いた。

路地裏の入り口、何かと大勢の視線が集まるそこに、黒服の男が立っている。そこから投げかけられた言葉に、彼女の目の前の暴

漢が全身の動きを止めていた。そのまま前のめりに倒れこむ背に、一本のナイフが突き刺さっている。

薄汚れた衣服に、じわりとみるみるうちに血が滲みだした。それを見て、それから自分の手と、身体にかかった返り血を見下ろし、はじめてサリュは寒気を覚えた。腰が抜け、倒れこむところを近づいてきた執事の男に支えられる。

「遅くなりまして申し訳ありません。近くでクアル様を見つけることができたのですが、急に走り出されてしまい。結果的に、よかったですと思いますが――ご無事ですか？ サリュ様っ」

思い出したように痛みが戻ってきていた。全身に痛みと、特に頭痛がひどい。視界が徐々に暗転する。意識が途切れる寸前、心配げにこちらへ寄り添う砂虎の姿に、彼女はわずかに口元を綻ばせた。

執事の男に背負われてサリュは屋敷への岐路に着いた。

意識を取り戻し次第、すぐに彼女は男の背中から降りた。全身には痛みが残っていたが、足元をふらつかせ、肩を借りながら道を歩く。胸には砂虎を抱えていた。体毛が彼女の衣服についた血で濡れている。

程なくしてたどり着いた豪華な屋敷の門前に金髪の女性の姿があった。

どこかの巡察に出ていたのを戻ってきたのか、薄い鎧を身にまとった姿で仁王立ちにこちらを見ている。遠めにも険しいその視線を受け、少女はまっすぐに彼女の元へと向かった。

「ごめんなさい」

頭を下げ、血に汚れた格好で少女は言った。

返事はなく、静かに騎士は彼女を見下ろしている。感情が包まれて読めない眼差しに言い知れぬ重圧を受け、サリュは顔を俯かせた。飼い主をかばうように胸元の砂虎がみゃうと鳴いた。

小さな吐息が漏れる音が聞こえた。

「怪我はないか？」

「……はい」

そうか、と再び嘆息とともに呟き、騎士は傍らに控えて立つ執事へと目を向けた。

「ご苦労だった」

男は無言のまま頭を下げた。

「湯を沸かせてある。血を洗うといい。クアルもな」

「――はい」

言いつけを破り外に出たというのに、騎士の口から責めるような言葉が一切出ないことが彼女には辛い。砂虎とともに抱えたナイフを握り締める。ふと、騎士の視線がそれに向けられた。

「大事なものは護れたか？」

優しい声が、どんな罵声よりもきつく彼女の心に突き刺さった。唇をわななかせ、彼女は頭を振った。声は出ない。答えることができなかった。

「……そうか」

少女の頭を撫で、騎士は去っていった。

館へと戻るその背中を見送る顔が歪む。金髪の女性のため息のような台詞には、確かに失望のそれが含まれていた。

次の日、少女は剣の鍛錬に出なかった。

ぱたりと扉が閉まり、男が去る。

残された室内の静けさの中にサリュはいた。

今しがた執事の男が朝食に呼びにきたのだが、体調不良を理由にそれを断り、彼女は寝台に横たわっていた。

天蓋に描かれた宗教画が、語りかけるように彼女を見下ろしている。緩やかに流れる長髪を波立たせた女性と、それを祝福するかのようには鳥の翼を持った小さな子どもが舞っている。それらがどういった光景を模写しているのか、水陸で最も信仰

されているその教義内容について理解のない彼女にはわからない。ただ、その中央に描かれた描かれた女性の微笑が、この屋敷の主人のそれと重なり、腕で顔を覆った。

かたり、と鳴る音に、寝台から床へと視線を向ける。用意されたミルクに顔を突っ込んだクアルが、一心不乱に中身を舐め取っていた。こぼしかけたらしいが、周囲には今のところ零れた様子はない。

「――クアル」

そっと呼びかける。ぴくりと耳を立てた砂虎が振り向いた。縦に虹彩の入った真ん丸い瞳が彼女を見つめ、それから自分の足元の平皿を見てから、駆け出す。寝台の上に飛び込んだきた小さな家族を、少女は思い切り抱きしめた。

砂の香りが胸を満たす。心安らぐその中に混ざる僅かな匂いに、眉が寄った。

昨日あれほどよく洗ったというのに、まだ血の匂いが残っている。毛玉のようなクアルの身体を転がし、どこにも血の跡が残っていないことを確認してから、思い至った。血の匂いが残っているのはむしろ自分かもしれない。

もちろん、彼女も昨日のうちに湯を浴びて身体を洗ってはいる。汚れた服装も洗い、それでも跡が残ったのであるとは女中達に引き取られてしまった。血の汚れは少なくとも表面上には残っていない。

だが、血に濡れた感触とその鉄錆びた匂いは、今も彼女の中から消えてはいなかった。

感傷のようなものだ。冷静な気分で少女は考えた。彼女が自分の意志で他人を傷つけたのは、昨日が初めてだった。

その事が彼女の精神に翳りを生んでいるわけではなかった。生き

る為に誰かを傷つけ、殺してしまうこともある。砂に生きる者として、その程度のことは彼女もわきまえていた。

彼女の胸に巣食っていたのは全く別の事だった。

剣を振ったことではなく、剣そのもの。つまりは騎士の言った言葉に全てが集約されている。――剣は、大事なものを護れたか。

その答えが否であるから彼女は言葉を返せなかった。

はじめは確かにそのはずだった。砂虎を守るように剣をとった。しかし次第に少女は剣に没頭し、砂虎を忘れた。いや、そうではない。砂虎ではなく、自分はただ誰かを忘れるために剣を振っていたのだ。クアルはその巻き添えを食らっただけだ。もし自分をはじめからそれが目的だったとしたら――きっかけにまで利用されたことになる。

「……ごめんね」

力いっぱいの謝罪を受け、ぎゃう、と苦しげに砂虎が暴れた。

それまでほとんど一日を費やしてきて剣を振らないとなれば、途端に時間が余るようになる。

今までの清算も込めて存分にクアルをかまいながら、彼女は無為に時を過ごした。脳裏にはどうしても彼のことが浮かび、離れない。

あの夜の別離からすでに十日以上が過ぎている。生きているのか。生きているのなら、いったいどうして見つからないのか。この街にはいないのか。河に下って流れてしまったのなら、自分が見つかった場所よりもさらに遠くまでいったとすれば。生死すら定かではなくなってしまう。

探したい。自分の足で彼を探しに行きたい。ふと、砂虎を探しに外に出たそのまま街を出てしまえば、と考えて、何を馬鹿なと頭を振った。

自分ひとりで生きる力も持たない身分で何ができるというのか。クアルを探しに少し街に出ただけであれだ。あの時、執事の男が来てくれなければどうなっていたか。寒気をおぼえた。それに。

彼のことは、金髪の女性が懸命に探してくれている。失せ人を昔から知るといふ彼女からは本当に良くしてもらっていた。もちろん、古い付き合いであったらしい彼から直接頼まれていたからではあるだろうが、その厚意を裏切って自儘にするわけにはいかなかった。

自分に出来ることは、彼女と、彼を信じて待つことだけだ。何も出来ないなら、せめて迷惑だけはかけないように。そう思えばこそ以前は部屋に閉じこもっていたのだが、前のように心を空にすることもできなかった。

遊びつかれたクアルがいつの間にか寝入ってしまったている。

起こさないよう静かに立ち上がり、少女は棚机に向かった。残された遺留品の中から塗料の剥げた玩具に手を伸ばす。色の揃ったそれを適当にバラし、改めて揃える。――すんなりと揃ってしまった。嘆息して、戻す。

旅の道具だったのだろう幾つかの小道具に手を伸ばし、用途の知れないそれらをしばらく眺め透かし、元へ。最後に彼女は本に手を伸ばした。表紙の次に挿された乾花を壊れないよう脇に置き、ぱらぱらとページをめくってみる。

文字の読めない彼女には、呪文のようにしか見えない文字の羅列。時に挿絵のようなものがあり、なにか後ほど書き加えられたような跡も見かける。元の持ち主であった彼女の村の長のものか、それとも――唐突にその可能性に思い至り、彼女は目を見開いた。

これは彼の文字かもしれない。

脳裏に、熾した火の下で本を読んでいた男の姿を思い出した。つまらなそうに頬杖をつき、ページをめくっていた男の横顔を、瞼が自然と落ちるまで彼女は眺めていた。

ずきんと胸が痛む。たった一月も前ではない出会いと、少しの旅路が遥か昔のことのように思えた。視界が滲む。涙が本に落ちないよう慌てて天井を仰ぎ、本を胸に抱いた。

そこに温かさの幻視を覚えたのは、ただ彼女の願望のものであったとしても。身近にあった彼の痕跡に、サリュは少しの間だけ声を出さずに泣いた。

「――文字を？」

夕食の際、少女は不思議そうに訊ねてくる女性に頷いた。

「本を、読みたいと思って……」

今朝の鍛錬に出なかった負い目があったから、それを願い出るのには勇気がいった。しかし女性は嫌な顔を見せず、むしろ大きく頷いて言った。

「それはいい。実は、私からも提案があったのだ」

今度はサリュが小首をかしげる。

「文字もそうだが。日中、時間があって暇だろう。サリュさえよければ、勉強をしてみてもどうかと思ってな」

「勉強？」

少女には聞きなれない言葉だった。貧しい村で育った彼女には今までそうした機会がなかった。精々が数かぞえと、育ての親でもあった老婆が生業としていた薬草について多少の知識があるだけである。閉鎖された環境ではそれだけで充分でもあった。

「ああ、そうだ。生きていく為の知識はあつて損はない。言語、数術、歴史。座学だけでなく、作法なども。剣術と同じだ。身体だけでなく、頭も動かしていた方がいいこともある——もちろん、気が向けばの話だが」

女性の上げたそれらがどんな場面で有効なのか、少女にはわからなかった。ただ、彼女が自分の為を思つてそう言ってくれていることはわかる。断れるはずがなかった。文字を学べるというだけで、サリュにとってはありがたかったから、女性の申し出は望外のことだった。

「ありがとうございます」

深く頭を下げる。それを見た女性が嬉しそうに微笑んだ。

「わかった。では、家の者にそう伝えておく。夕食にしよう。……腹は空いているか？」

「はい。いただきます」

正直に言えばあまり食欲はなかったが、これ以上、目の前の女性に僅かでも心配をかけたくなかった。足元では食事を供にすることになったクアルが平皿と格闘している。

出された食事を、全てとはいかずとも半分以上食べることが出来た。それを見た同席の女性の表情が翳らなかったことを彼女は嬉しく思った。

翌日から始められた少女への教育で講師に立ったのは執事の男である。彼はサリュと同じく平民の出ではあったが、主人つきの側近となるからには相応の知識と経験、作法の心得が必要とされた。

扱われる内容は多岐に渡った。二十の記号からなる表音文字の習得、それによって古くから残されてきた歴史、数ある国の興りと滅び。その舞台となる水陸の成り立ちについて伝えられる説話、それを虚実入り交えて語る神話と宗教論。座学以外にも食事作法や礼儀式、会話として用いられる言葉遣い。歩法についても指導があった。

彼女への教育には貴族が受けるべきものと、平民が受けるべき双方が入り乱れていた。貧民の出である少女には到底必要になさそうなものまで含まれている。社交礼儀を学ぶなら欠かすことの出来ない舞踏に触れられていないのは明らかに女当主の意向だったが、それ以外にも思惑は見取れた。

つまり金髪の女性は、あくまで可能性を提示しようとしているのだった。

彼女は友人から少女について頼まれていた。故郷を失ったと聞く少女が、これからどうやって生きていくか。その為に必要なことは全てするつもりだったし、与えるつもりでもいた。今回の教育もその一環である。

まだ本人には伝えていないが、彼女はそのままサリュを養うつもりでいた。彼女もいまだ家庭のない身ではあるが、一人の孤児を引き取ることは難しくない。その中で少女が生きるための知識を得、自らの志向にあった何かを見つけることができたならよいと考えて

いた。

その為にまずは少女の適正、及び可能性の幅にあたりをつけようと、思いつく全てを試してみることにしたのだが――一度に与えられるにはあまりに多いそれらに、少女は決して音をあげなかった。

少女は与えられる全てをよく学んでみせた。決して一を聞いて十を知る破格の聡明さではなかったが、どんな話にも真剣に耳を傾け、理解に努めた。

剣の鍛錬の時と同じだ。才というよりは性格。いや、想いというべきだろう。

何事にも真面目に取り組む姿勢や、今までにろくに教育を受けたことがなく、価値観に凝り固まっていけないのも、もちろんその大きな要因にはなっている。だが、それ以上に少女の学習意欲を支えるものがあるのは明白だった。

少女は日々膨大な量を教わるその中で、特に言葉に強い興味を示した。帝国共用語の基礎を習得すると、今度は様々な単語の意味とその用法について訊ねるようになった。その質問には決まって一冊の本が使われた。しっかりと縁まで装訂された古びた書物。文字を覚えたばかりの少女が読むには明らかに荷が重いそれが誰の持ち物であるか、もちろん金髪の女性も知っている。

ため息が出た。つまりそれが少女の全ての根幹であり、同時に彼女を深く縛りつけてもいるのだった。それを忘れるというのが無理なことも承知している。それは何故か。同じことは、何も少女だけに限った話ではないからに違いなかった。

講師に立つのは執事の男だけではなく、時間がある時には金髪の女性がサリュに教えることもあった。

この時代、専門的な教育を受けられるのはほとんどが貴族だけの

特権であり、彼女もまた首都ヴァルガードにて学生時代を過ごしている。大学を出て既に数年がたつが、知識量では当時の最高水準のものを彼女は持っていた。

故に、執事の身分では聞き及ぶことすらないそうした知識について彼女自身が教鞭をとることになったのだが、実際にはそうした専門教育より、雑学めいた話に流れることの方が多かった。

ある日、女性が話題に上げたのは帝国で研究されている技術についてである。

「――砂の、船？」

「ああ。帆船というものはわかるか？　そうか。船はわかるな？」少女は頷く。この街から逃げ出そうとした時に乗り、それから――彼女の表情が翳ったのを見て、すぐに女性が言葉を継いだ。

「ともかく、船だ。それに大きな布を張って――帆というんだが――その帆に風を受けて、その力で動く。そういうのを帆船という。水は漕ぐことができるが砂ではそうはいかない。だから、後ろから風を受けて砂の上を進もうというわけだ」

「そんなものが……」

シートをなびかせて砂海を渡る船を頭に思い浮かべようとするが、上手く脳裏に描きだせない。頭を捻る様子に、女性は微笑を浮かべながら続けた。

「似たようなものは昔からあるが、それらはほとんど一人用だった。船というよりは帆をつけた板のようなものだ。だが、何人もの乗る込むような大きさになると途端に難しくなる。必要な力が大きいからな。その為にはもっとたくさんの風の力が必要で、そうすると当然、帆も大きくならなければならない。そうして帆を支える軸もさらに巨大化して――堂々巡りだ。だから、なかなか研究がはかどらずにいた」

「あの人が、その研究を？」

「研究というか、首を突っ込んでいただけだが」

女性と言った。

「私達の通っていた大学には、各国の貴族子女への教育の他に、優れた技術者や学者の保護という目的もあったから、色々な人間が集められていた。中にはなんとというか、相当に個性的な相手も多かったんだが……困ったことに、あいつはそういうのが好きだった。砂帆船。燃える石。手を触れずに動く装置——動力という。そういうのとか。色々と、授業をサボってそういうところによく顔を出していたよ」

「……変わり者、だったんですね」

「変人として有名だった」

至極真面目な表情で頷く。

「あれでもツヴァイ宰相閣下の実子だから。周りの注目は王族並に高いのに、あいつはそんなことまるで気にも留めなかった。大学では各国それぞれ派閥を作って、同じ国の中でも色々と面倒も多かったんだが、そうした類の話にもまるで興味を示そうとしない。そんなことに関わるくらいなら、昼寝するか図書館で本を読んでいるような奴だった」

貴族と呼ばれる種類の人々の間で交わされる様々なしがらみについて、もちろん少女は全く想像のしようもない。しかし、その人物が騒動の脇で一人、本を読んでいる姿は容易に頭に浮かぶ。

少女の口元がほころんだ。それを見守る金髪の女性の表情も柔らかい。

「そういえば、その砂帆船であいつが言っていたことだが——」

雑学というより想い出語りではあるが、少女にとってもむしろそちらの方が好ましかった。彼女がその人物と一緒に旅をしたのはほんの僅かな期間でしかない。自分の知らない彼について聞かされる度に、相手のことを身近に感じられるようだった。

共通の人物について、まるで姉妹のように語る二人の傍らには執事の男が控えている。息休めに葉茶の用意をして二人の前に差し出す。香り高い葉茶の香気とともに、穏やかな時間が流れた。

少女の心は少しずつ癒されていった。

無論、いまだ掴めない男の消息について不安と焦慮はある。しかし、心を空にするのでもなく、逃避に他の何かを持ち出すのでもなく、狂せず彼の安否を待ち続けられたのは、間違いなく当主の女性の心配りの成果だった。

細々とした職務に精励しながら、女性は共に食事を取り、知識を教え、想い出を語り、姉のような態度で少女に接した。サリュの方でもそうした女性の厚意に感謝していた。特殊な家庭環境で過ごした彼女にとって、女性からの温かな扱いはまさしく生まれて始めてのものだった。

少女は剣の鍛錬にも再び顔を出すようになっていた。女性が極力、自分との時間を持つようとしてくれていることに気づいていたから、そのことで少しは昼間にも顔を出そうとしてくれる女性への負担を減らせるのではないかと考えたからである。今度こそ、偽りなく護る為に剣を学びたいという気持ちもあった。彼女達が朝方、鍛錬に励む横では、小さな砂虎が自らの高さほどある草原のなかでやんちゃに駆け巡っている。

そうして、少しばかりの日々が過ぎた。

その晩、サリュは本を胸に廊下を歩いていた。

夕飯後の時間に自室で本を読み、どうしても理解できないくどらがあった。執事の男に聞いたところ、古語の類で書かれてあるらし

く彼にも翻訳は難しいという。それならばと、金髪の女性に訊ねるべくその私室へと向かっているとところだった。

廊下を歩いているのは少女一人であり、案内役の人間はいない。この一月ほどの間に、少女は客人というより家族としての扱いを受けるようになっていた。

広大な屋敷で、主人の私室までの廊下は長い。前に訪れたこともあって道に間違いはないはずだが、所々に灯りを焚かれて人気のない廊下には奇妙な雰囲気があった。ふとした不安をおぼえて、彼女は胸の中の本に力を込めた。本当はクアルの方を抱きしめたいところだが、部屋の中でぐっすり眠っていたので起こすのがためらわれた。それに——こうすれば、あの人が守ってくれるような気がする。

最近の少女にとって、本と、主人から聞かされる話が彼の全てだった。短い旅でほとんど知ることなく終わったあの人物についてもっと知りたいと強く思っていた。彼はいったい何故、旅をしていたのか。彼はいったい何故、求めたのか。何故あんなにも飢えていたのか。

それを知るうえで、特に本は有用なものに思えた。金髪の女性が言っていた。あいつは昔から、一人でよく本を読んでいたと。彼の思いを追体験するように、少女は本を読むことを欲した。

腕の中の本は、まだほとんど触りの部分しか読み込めていない。帝国公用語の基礎だけは学んだが、単語や熟語についてはまだまだ知識不足であり、古い言葉で綴られている部分も多かった。難解な解釈が、ますます彼という人物を表している気がして、少女はただそれに没頭していた。

だから、気づかなかった。

何かの音がした。周囲が静まり返っているからこそ聞き取れた程

度の大きさ。風の音かと思ったが、硝子窓の外景は光無く、静かに暗がりの中に落ち込んでいる。

気のせい。いや、確かに聞こえる。少女は廊下の奥へと目をやった。一筋の光が廊下に漏れていた。その室内から、音は聞こえてくるようだった。

足音を忍ばせて少女はその部屋へ近づき。そして、見た。

そこは屋敷の主人の私室だった。落ち着いた装飾で彩られた広さのある空間、その中央に絹髪を背中に流した女性が半ば背中を向けて佇んでいる。その肩が、震えていた。

「――ニクラス」

サリュは呼吸を忘れ、瞳を見開いて動きを止めた。

それほどまでに悲痛さに満ちた、それは声だった。

「どこにいる。なぜ見つからない……」

顔を俯かせ、自らを抱くようにした女性の胸元に何かがあった。小さな四方形の板を大事そうに抱え込んでいる。ちょうど、少女の胸にある本のように。

「頼む。頼むから、生きて――」

押し殺した声が涙に濡れていた。

それ以上その場にいることが出来ず、少女は身を翻して廊下を走った。足音に気をつけることすら忘れ、ただ逃げ出した。

頭に殴られたような衝撃を覚えていた。

――ニクラス。彼の名前。自分の知らない、彼の本当の。自分のものではない、彼。

一体いつから、自分は彼を自らの所有物のように考えていたのだ。

何故、与えられる為に待つことを当然のように思っていたのだろう。彼のことで嘆き、悲しんでいるのが自分だけだと、いつから思い上がっていた――？

そんなわけが、あるはずがないのに。

金髪の女性は何年も前からの彼の知り合いだと言った。

まだ訪れたことのない都で、ともに学生時代を過ごした友人。ただの友人ではないことは、さきほどの女性の姿を見れば瞭然たる事実だった。

自分が想うように。いや、きっとそれ以上の気持ちで、あの人は彼のことを想っている――

その事実よりもむしろ、今更そんなことに気づいたことが彼女にはショックだった。

自分が情けなく取り乱し、落ち込んでいる間、ずっとあの女性は自分の気持ちを隠していたのだ。それを表に出さず、ただこちらのことを思いやってくれていた。

廊下を駆け、自分の部屋へ戻る。勢いよく扉を閉めたせいで砂虎が眠りから目覚め、首を持ち上げて彼女を見た。気づかず、サリユは柵机へと向かう。そこには男の持ち物が置かれてある。自分が独占していた、彼の物。

腕の中のそれもそうだ。少女は本を置き、その横にある乾いた花に視線を落とした。

これだけは彼女のものだった。ひねくれた魔法使いが少女に残してくれた、たった一つ。水気のなくなったそれをそっと包もうとするが、それだけで花卉はもろくも崩れ散ってしまった。

衝動が胸を衝き、彼女は寝台へと走った。うつぶせに倒れこみ、声を殺して息を吐く。寝室に上がってきたクアルが耳元で鳴いている。それに応えず、少女はただ全身を震わせた。

涙が出たのは、悲しさでも過ちへの悔しさでもなかった。

女性の優しさとそれに気づきもせず甘えきっていた自分。あるいはそれ以外にも、少女の心をあれほどまでに強く揺れ動かした理由があったにせよ――自らの心の機微に疎い彼女がそのことに気づくはずもなかった。ただ女性への申し訳なさ pensando、サリュは夜を過ごした。

――ここにはいられない。

一晚を明かし、少女はそう想いを決めた。

泣き腫らした顔を洗い、服を着替え短刀を取って、クアルを抱いて外へ出る。

中庭の奥には既に女性の姿があった。こちらを見て、穏やかに微笑んでくる。

「おはよう。サリュ」

その表情に昨夜の名残はなかった。だからこそ、少女はさらに決心を固めた。

「……具合でも悪いのか？」

挨拶もなく黙り込む少女に女性が訊ねる。

ただひたすらに自分を思いやってくれるその相手に向けて、サリュは言った。

「私、ここを出ます」

女性が驚いたように瞬きした。それから、微笑で返す。

「いきなりどうした。何かあったのか？」

少女は首を振った。

「では、なぜそんなことを言う。黙っていてもわからん、理由を話してみろ」

やや視線が厳しくなる。顔を伏せ、少女はもう一度首を振った。理由など、話せるはずがない。この女性は、懸命にそうであろうと演じてくれているのだ。その本心を盗み見たからですなどと、本人に告げられるはずがなかった。

「お前まで、私を置いていくのか……？」

感情の失せた声。思わず少女は顔を上げ、息を呑んだ。

女性が顔を歪めていた。怒るのではなく、泣くのを必死に我慢しているような幼い表情だった。脳裏に昨夜の光景が蘇った。

そうじゃありません、と言いかけて、サリュは唇を噛み締めた。

目の前の女性の名誉を守りつつ、どう弁明すればよいか彼女にはわからなかった。あいまいな言葉ではきつと伝わらず、それで逆に自分が説得されてしまうわけにはいかない。決心を貫く為に今、最も有効なのは、沈黙だった。

拳を握り、少女は耐えた。誤解を受け、恩知らずと罵られても仕方がないと覚悟を決める。

長い沈黙の後、

「わかった。好きにすればいい」

吐き捨てるように女性が告げた。そのまま日課であるはずの鍛錬の途中で去っていく。

女性の後ろ姿を眺め、少女は黙って頭を下げた。

少女からそのことを告げられた執事の男は、少なくとも表面上には驚きを見せなかった。鉄面皮のような表情で頷いて、

「左様でございますか」

とだけ言った。

「……ごめんなさい」

「いえ、我々どもにサリュ様を縛る権利はございません。ご出立はいつに？」

「すぐにでも。出ようと思います。勝手を言って、これ以上甘えるわけにはいかないので……」

そうですか、と呟き、男はしばし考え込むように顎に手をあてた。「……よろしければ、ご出立は明日ということをお願いできませんでしょうか。お嬢様も、いきなりのことでは驚かれたと思います。せめてあと一晩、ともにお食事を」

言われて、サリュはわずかに顔をしかめた。

「でも、クリステイナさんが。嫌なんじゃ」

「そのようなことはございません」

きっぱりと男は言い切った。

「不器用な方ですので、今はただ急なことに戸惑われているのです。このまま、サリュ様とお別れということになると後できっと後悔なされます。どうかあと一晩、お願いできませんか」

頭を下げられ、慌てて少女はそれを止めた。そんな真似をされるまでもなく、今までにもらった厚意に報いる為ならどんなことでもするつもりだった。

サリュは出立を明日に伸ばし、その日は館でお世話になった人々へお礼を言ってまわった。

夜、食卓で館の主人は不機嫌そうな表情のままだった。

何か話さなければならぬ。お礼、それとも言い訳？ 一日中考

えたはずのそれらが、女性の険悪な雰囲気の前に霧となって消えていき、唯一つ、どうしても訊ねておきたいことだけが口にのぼった。

「クリスティナさん」

「……なんだ」

「――あの本だけ。持っていかせてもらえませんか」

女性の視線が少女を見た。はじめて向けられるような厳しい眼差しに身をすくめかけ、それでもこれだけは我を通したいと思って目をそらさず、

「好きにしろ」

女性が言った。それきり口を閉じ、黙々と食事を続ける。

「……ありがとうございます」

頭を下げ、少女も食事に戻った。

それ以上はどちらも口を開かないまま、最後の晚餐は終わった。

次の日、朝早くに起きてすぐにサリュは出立の用意を終えた。

とはいえ用意というほどのものもない。本と、砂虎と、大外套。ほとんどそれだけが彼女の私物だった。一月近くの間、寝床にした部屋を見渡す。感傷はあったが、それ以上の期待と不安が胸に満ちていた。

清掃中の女中達の間を抜け、外へ出る。

砂の濁りなく、空は青く澄み渡っていた。前庭を歩き、少女は正門の前の人影に気づいた。

執事の男が立っていた。手綱を持っている。それに繋がれているのは見覚えのあるこぶつき馬で、背中には荷物がくくられていた。

男がもう片方に持った布袋を渡され、困惑した表情でサリュは男を見上げた。

「中をご覧ください」

袋の中を覗く。幾つかの道具と、小さくたたんだ羊皮紙、さらに布袋などが入っている。

「現時点での水陸図と、方位磁器。それに量傾器です。使い方は、以前にお話したのを覚えていますか？」

目の前の物の意味がわからず、ただ聞かれた通りに少女は頷いた。「では、少し地図を。――ここが、トマスです。四方の水路。この水陸の全てとも言っている、大水脈です。北に帝都。はるか南東がボッケノクス。お話を聞いた限り、サリュ様がやってきたのはこちらですね。ボッケノクスとの境は最近、大規模な干ばつで航路が干上がっています。水路の在り方だけ、決してお忘れのないようご注意ください。当然、塩と水もです。袋には帝国通貨をいくらか用意しておきましたが、地域によっては大きく価値が異なりますし、辺境ではそもそも砂粒と同じに扱われることもあります。くれぐれもお気をつけください」

口早に説明を受け、ようやく自分が自分に与えられようとしているものと少女は気づいた。あわてて男に押し付ける。

「こんなもの、いただけませんっ」

「では、三日ともたずに死ぬおつもりですか？」

冷やかな声に、言葉を失う。

「水も塩も、馬も連れずに生きられるほど砂海は優しくございません。知恵も知識も、この短な時間で教えられたものはわずかです。サリュ様が彼の方を探すためにはまず生きる必要があります、生きる為には道具が必要なのです。おわかりいただけますね？」

諭されるように言われ、少女は反駁の言葉を持たずに唇を噛んだ。

「我が主からの手向けの品です。どうぞ、お受け取りください」

「……クリスティナさんが？」

にこりと男が微笑んだ。

「一通り、必要な一式は整っているかと思います。昨日、大慌てで

旅に必要なものを整えろとのご命令を受けましたので、不備があるかもしれません――」

「余計なことを言うな」

不機嫌そうな声がした。口を閉ざした男が一步下がって沈黙する。後ろを振り向くと、金髪の女性が歩いてきていた。

「それらはいつのものではない。……馬は違うが。それなら、持つていけるだろう?」

素っ気ない口調で女性は言った。わざわざ彼の物ではないものを用意してくれた彼女の意図を理解して、サリュは頭を下げた。

「っ……ありがとうございます」

「……うん」

女性の声にはまだしこりのようなものが残っていたが、顔をあげた少女を見つめ、ため息とともにそれを吹き払った。

「それから、これもだ」

少女が渡されたのは二本の短剣だった。どちらにも見覚えがある。一本は剣の鍛錬で少女自身が使っていた物。短い刀身と大きな鰐つきのそれで、もう一本は、形状は知っているが布の外された状態を見るのは初めてだった。鰐がなく、短剣というには刀身が長く伸びたその剣は、目の前の女性が鍛錬に用いていたものだった。

温かな声で、女性が言った。

「剣は必要だろう?」

胸に詰まるものを覚えながら、サリュは頷いた。声を出せば瞳にたまったものが落ちてしまいそうで、懸命に我慢する。その様子を見た金髪の女性が笑った。

伸ばされた手が少女の目じりを拭う。幼い頃から剣を振るってき

て傷つき、皮膚が硬くなっているはずなのに、とても柔らかな指先だった。

「必ず戻って来い。あの馬鹿と一緒に。――必ずだぞ」

一瞬、女性の瞳が潤んだように思えた。はい、と頷いて、ほとんど声にならず、慟哭を押さえつけてサリュは言った。

「……はい。必ず」

――貴女のもとに、あの人を連れて帰ります。

後半の誓いは胸の裡にだけ。

「南の門番に話をつけてありますので、そこまでは私がお見送りします」

男に頷き、少女は最後にもう一度振り返る。

自分を優しく包み込んでくれた女性と、その屋敷。生まれて始めて感じた温かなその両者を視界に収め、そしてサリュはそれから顔を背けた。

白磁の建物群の中にあって、空は青く、砂は止み、風は落ち着いて沈んでいる。

だが、自らに囁く声を彼女はその身に聞いていた。

――生きる。そして、必ず戻ってくる。

呼ぶ声に応えるように、少女は自らを砂の海へと投じる一步を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8672p/>

砂の星、響く声 外伝

2011年9月23日00時00分発行